

六 学校行事

1. 学校日誌の記録

① 中学校

震災による行事日程や授業等の変更について、日誌から拾えるものを掲載する。掲載の順序は日誌の項目別とする。

◎重要事項

創立記念音楽会（於中学校） 四月二十九日（土）例年高校で行われている創立記念音楽会を、今年は被災者への激励の意味を込めて広く一般に公開し、中学校講堂で行われた。出演はピアノリストの「ホルク」デームス氏で、午前・午後の部とも盛況であった。大雨洪水警報発令による臨時休校

期間中、当該警報発令による臨時休校が四回という異例の多さになった（五月一二日（金）、同一五日（月）、七月三日（月）、同四日（火））。大雨の日が多かったのも確かだが、震災による地盤悪化のため警報発令の基準が従来の七〇％に下げられており、

震災の間接的影響といえる。

一学期の延長

前年度の三学期が、震災による休校や短縮授業によって、大幅に授業日数が減ったため、この回復のため一学期の通常授業を七月一三日日まで、終業式を同二四日（月）まで延長した。

◎授業に関する事項

土曜日の午前中三限授業

震災による交通機関の乱れのため、期間中は九時登校、午前中三限、午後三限の変則時間割が組まれた。このため、土曜日や保護者会当日等午前中授業の日が軒並み三限授業となった。ただし、七月二二日（土）は、考查返却の授業で、科目数確保のため四〇分四限が実施された。

◎その他

甲友会総会（於中学校） 四月一五日（土）

例年学校外の会場で行われている甲友会総会も、震災による会場確保困難のため、中学校会議室で行わ

れた。

学校日誌に記載されている事項の中から、震災に係
すると思われる事項を日を追って記す。

四月 八日(土) 午前中三限授業*一

一五日(土) 午前中三限授業*一

甲友会総会*二

二九日(土) 創立記念音楽会*三

五月 一二日(金) 大雨洪水警報発令のため臨時休校*四

一三日(土) 午前中三限授業*一

一五日(月) 大雨洪水警報発令のため臨時休校*四

二〇日(土) 午前中三限授業*一

六月 三日(土) 午前中三限授業*一

一〇日(土) 午前中三限授業*一

一二日(月) 保護者会 午前中三限授業*一

一三日(火) 保護者会 午前中三限授業*一

二四日(土) 午前中三限授業*一

七月 一日(土) 午前中三限授業*一

三日(月) 大雨洪水警報発令のため臨時休校*四

四日(火) 大雨洪水警報発令のため臨時休校*四

二一日(金) 午前中四〇分四限授業*五

二二日(土) 午前中四〇分四限授業*五

二四日(月) 午前中四〇分四限授業*五 四限目大掃

除、終業式

*一：震災による交通機関の乱れのため、期間中は九時
登校、午前中三限、午後三限の変則時間割が組ま
れた。このため、土曜日や保護者会当日等午前中
授業の日は軒並み三限授業となった。

*二：例年学校外の会場で行われている甲友会総会も、
震災による会場確保困難のため、中学校会議室で
行われた。

*三：例年高校で行われている創立記念音楽会を、今年
は被災者への激励の意味を込めて広く一般に公開
し、中学校講堂で行われた。出演はピアニストの
イオルクリデームス氏で、午前・午後の部とも盛
況であった。

*四：期間中、当該警報発令による臨時休校が四回とい

う異例の多さになった。大雨の日が多かったのも確かだが、震災による地盤悪化のため警報発令の基準が従来の一七〇％に下げられており、震災の間接的影響といえる。

＊五：前年度の三学期が震災による休校や短縮授業によって大幅に授業日数が減ったため、これの回復のため一学期の通常授業を七月一三日（木）まで、終業式を同二四日（月）まで延長した。

（河田 優）

② 高等学校

◎授業に関する事項

一学期は九時二〇分、第一限開始、五〇分授業。午前三限、午後三限の六限授業。七月一五・一七日は、考查返却の授業で四〇分、五限授業。

学校日誌に記載されている事項の中から、震災に関係すると思われる事項を目を追って記す。ただし、中学校と共通事項は略す。

四月二一日（金） 午前中三限授業。育友会総会・保護者会。
四月二六日（水） 午前中三限授業。体育祭予行準備。翌日、予行。

五月一二日（金） 大雨洪水警報発令のため臨時休校。

五月一三日（土） 午前中四〇分三限授業。体育祭準備。中間考査時間割発表。翌日、体育祭。

七月三日（月） 大雨洪水警報発令のため臨時休校。

七月四日（火） 大雨洪水警報発令のため臨時休校。

七月五日（水） 第一学期期末考査第一日、交通機関延着などで二〇分遅れで開始。

七月一五日（土） 午前中四〇分五限授業。

七月一七日（月） 午前中四〇分五限授業。

七月二〇日（木） 終業式。

なお、高校二年生の北海道修学旅行は六月一二日（月）～一五日（金）に実施されたが、中学一年生の鉢伏高原合宿は七月二五日（火）～二七日（木）、二年生の大山合宿は七月二九日（土）～八月一日（火）に、例年よりも遅くに実施された。さらに終業式の日採点報告と採

◎高校時間割

①1995.2.1～2.25

第1限 10:00～10:50

第2限 11:00～11:50

第3限 12:40～13:30

第4限 13:40～14:30

(午前2限、午後2限、40分授業)

②1995.3.6～3.22

第1限 9:35～10:20

第2限 10:30～11:15

第3限 11:25～12:10

第4限 12:55～13:40

第5限 13:50～14:35

第6限 14:45～15:30

(午前3限、午後3限、45分授業)

③1995.4.10～7.1

第1限 9:20～10:10

第2限 10:20～11:10

第3限 11:20～12:10

第4限 12:55～13:45

第5限 13:55～14:45

第6限 14:55～15:45

(午前3限、午後3限、50分授業)

考查期間や短縮授業期間は除く。

平常授業は2学期より始まる。

④平常授業

第1限 8:50～9:40

第2限 9:50～10:40

第3限 10:50～11:40

第4限 11:50～12:40

第5限 13:30～14:20

第6限 14:30～15:20

(午前4限、午後2限、50分授業)

◎中学校時間割

①1995.2.1～2.27

第1限 10:10～11:00

第2限 11:10～12:00

第3限 12:40～13:30

第4限 13:40～14:30

(午前2限、午後2限、50分授業)

=2.4より土曜・水曜休校=

②1995.4.9～7.22

第1限 9:10～10:00

第2限 10:10～11:00

第3限 11:10～12:00

第4限 12:45～13:35

第5限 13:45～14:35

第6限 14:45～15:35

(午前3限、午後3限、50分授業)

考查期間や短縮授業期間は除く。

平常授業は2学期より始まる。

③平常授業

第1限 8:35～9:25

第2限 9:35～10:25

第3限 10:40～11:30

第4限 11:40～12:30

第5限 13:20～14:10

第6限 14:20～15:10

(午前4限、午後2限、50分授業)

点処理がなされたため、中学生の通知表はすべて保護者に郵送された。中学一年生は終業式の翌日に鉢伏合宿に出發したため、郵送は七月二十九日以降となった。

(山内 英正)

2. スキー(中学校)

今年度のスキー合宿は、本来ならば二月一九日(日)に始まり、二三日(木)に終るはずであった。あの一月一七日の阪神大震災のあと、一月三〇日の一時に登校日が設定され、久しぶりに授業が再開されたのは、その二日後の二月一日からであった。短縮授業でしかも水曜日と土曜日が休校という状況の中で、三年担任団はスキー合宿について再検討することを余儀なくされた。まず二月中の本来の実施日に行うことは、交通機関の寸断という悪条件だけでなく、他の諸条件を考慮に入れると不可能であるということは、担任団の会議ですぐに合意された。中止するか、三月中旬(中学入試直後)に延期するかは二者択一となった。旅館についても、一年前からの予約であ

るので、自由に日程を変更できるというわけではない。こういった諸問題の処理について、岡先生は旅行社と折衝し、情報を整理して担任団に提示して下さり、また議論を行った。「こんな時に果してスキーに行ったものかどうか」、「いや、こんな暗い時だからこそスキーに行つてすこしでもよい思い出を作る方がいいのではないか」と意見も分れていた。

各クラスの保護者役員の方からも御意見をいただいた。なかなか結論が出ないので各クラスで生徒に聞いてみることにした。スキーに行くことに對する強い反対はなかった。被災のひどかった生徒諸君たちも「ぜひ行きたい」という希望のものが多かった。「それでは」ということになり、三月一五日から一九日がおさえられたのである。

JRを使うのではなく、新大阪からバスで行き、夜行バスで帰ってくることにしたのである。スキー合宿の中味については割愛させていただくが、みるみるうちに上達し楽しい思い出を胸に帰ってきた生徒が多かった。

昨年のように一月のスキー合宿と異なり、比較的暖かい春スキーとなったので、かぜをひいて体調を崩す生徒がほとんどいなかったのが担任団としてはありがたいことであつた。野外活動は生徒のメンタルケアに有効であつた。

(寺田 俊夫)

3. 卒業式(高等学校)

卒業式は様々なことを考慮した結果、三月二四日に行われることになった。大学受験の可否結果がわかった後の卒業式ということについて、生徒たちの気持ちを確かめられないままの決定であつたため、当日までいろいろと心配をしていたが、ほとんどの者が出席して、例年と変わりのない元氣な卒業式が行われた。学年としては、大震災の後、全員が初めて一同に会する機会であり、別れであつた。

(妙島 秋男)

4. 創立記念音楽会

四月二九日、「大震災からの復興を願つて」と題された第四七回創立記念音楽会が、著名なピアニスト、イェルクリデームス氏をお招きして中学校講堂で催された。

今年は震災により、創立記念音楽会の中止もやむを得ない状況であつたが、丁度来日を予定されていたデームス氏から、被災地の皆さんにピアノを通じて音楽で少しでも心を癒し、励ましになるのであれば喜んで時間を作りましたというお話があつて、この音楽会が実現した。

従来、会場は高等学校であつたが、交通機関の復旧がままならないこともあり、比較的足の便のよい中学校に変更された。香櫨園周辺は市内でも震災の被害の特に大さかった地区の一つで、音楽会には地元の被災された方々をお招きした。

会場の混雑が予想されたため、入場整理券を配ることになり、生徒一人当たり三枚を限度に必要枚数を申請させたところ、講堂の収容人数をはるかに超える申込みがあつた。そこでデームス氏側と再三の交渉の末、無理を

お願いして午前と午後の二回演奏して頂くことになった。

当日は風が強く、時折小雨の降る悪天候であったが、開場時刻には長蛇の列が出来た。会場は満員であったが、整理券をめぐるトラブルや危惧されたほどの混雑もなかった。出席人数は午前七三四名、午後七二八名、合計一四六二名であった。

デームス氏は当日夜、東京での音楽会が既に決まっております、それに出演されるためにすぐに東京に向かわれるという大変にお忙しいスケジュールの中、特に時間を作って頂いたことに、心より感謝する次第である。

(有馬 博隆)

PROGRAM

- | | |
|------------------------|---|
| バッハ
(1685~1750) | ・ 半音階的幻想曲とフーガ
二短調 BWV-903 |
| モーツァルト
(1756~1791) | ・ 幻想曲 二短調 K-397 |
| ベートーヴェン
(1770~1827) | ・ クラヴィエアのためのソナタ 第14番 op.27-2
(幻想曲風ソナタ) 調ハ短調 “月光” |
| ショパン
(1810~1849) | ・ バラード 第3番 (水の精)
変イ長調 op.47 |
| ドビュッシー
(1862~1918) | ・ 水の精 (前奏曲集II) 一 第8曲
水の反映 (影像I 一 第1曲)
沈める寺 (前奏曲集I 一 第10曲)
月の光 (ベルカマスケ組曲 第3曲) |
| C. フランク
(1822~1890) | ・ 前奏曲、コラールとフーガ |

本荘使用のピアノは、オホベアセンドルファー社のご好意により、
Bösendorfer Model-290 (型番13125250) 製造2007年 をお借りしております。

第47回創立記念音楽会 (大岡山からの復興を願って)

Piano Recital

Jörg Demus

イコルタ・デームス

1995・4・29 (祝) 12:00 開演
12:30 開演
甲陽学院中学校講堂 (香蓮園)

後援五人 甲陽学院 高等学校 主催
後援者 甲陽学院 中学校 後援

西宮市の私立甲陽学院
は十九日に中園町の
同学院中学校講堂で開く
創立記念音楽会「アール
ク・デームス・ピアノ・
リサイタル」に、地域の
被災者約百人を招待す
る。中学の体育館は震災
直後から三月末まで避難
所となり、一日二千人
以上が避難生活を送っ
た。音楽を共にした人々
に一緒に音楽を楽しんで
もらおう、と企画し、香

創立記念音楽会に 被災者100人を招待

29日 西宮・私立甲陽学院

機関小など近々の避難所
を回り、参加を呼びかけ
ている。
創立記念音楽会は一九
四九年から、国内の一流
奏者を招き毎年春に開
催。震災のため今年は開
催が危ぶまれたが、デ
ームスさんが東京公演
のために来日すること
を知った音楽担当の松
井義知教諭が知人を通
じて出演依頼したところ、
「被災地の皆さん

心をやしなうし助ましになる
なら」と快諾を得た。午
後一時開演。ベートー
ベンの「月光」、ドビュッ
シーの「水の精」などを
演奏予定。
また、一般の音楽ファ
ンのためにも白席を用
意。二十四日午前十時か
ら先着順に電話（079
8・73・3013）で申
し込みを受け付ける。同
日午後三時から電話申し込
みが必要。

平成7年4月

学校法人 気馬育英会 中村 泰三
甲陽学院中学校・高等学校校長

この度の大震災により被災された皆様にご心よりお見舞
い申し上げます。

さて、第47回創立記念音楽会を下記のようにピアノの
イオルク・デームス氏をお招きして開催いたしますので、
ご案内申し上げます。

日 時 平成7年4月29日(祝)

12:00 開 場

12:30 開 演

場 所 本学院中学校講堂

阪神西園地駅南西・西園地デパート南側

お願い

- ①駐車場がありませんので、車でのご来校はご遠慮下さい。
いなるべく上り車を御用います。
- ②演奏中の撮影、録音はご遠慮下さい。

③ご入場は、会場の都合により、本券ご持参の方に
限らせていただきます。

第47回 創立記念音楽会

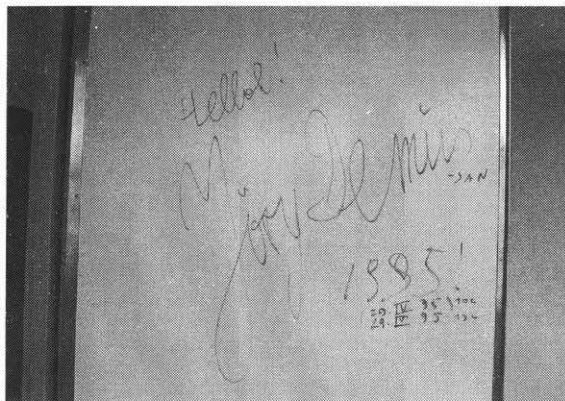
入 場 整 理 券 (ご1名様)

(ご来場の際は入口で本券をご提出下さい。)

『毎日新聞〔阪神・尼崎版〕』 1995. 4. 21

デームス氏のサイン

— 中学校音楽研究室扉 —



被災地いやす調べを

オーストリアのピアニスト

甲陽学院でリサイタル

29日、西宮



「被災地のために」とリサイタルを企画するデームスさん

オーストリアの著名なピアニスト、イヨルク・デームスさんが二十九日、阪神大震災の被災者への励ましになればと、西宮市中華館の甲陽学院中学講堂で「大震災からの復興を願って」と題したピアノリサイタルを開く。

デームスさんは、十四歳でデビューして以来、国際舞台で活躍している。同学院は毎年、五月三日の創立記念日即後に、第一線の演奏会を招き、「創立記念音楽会」を開催していたが、今年は震災で同学院の周辺に大きな被害があり、開催が危ぶまれていた。しかし、教員が、四月下旬からデームス氏が公演で来日することを知り、知人を通じて打診したところ、「ピアノで、被災者の心がいやされるのなら、喜んで時間をとる」と快諾を得て、開催が決まった。

演奏曲は、ベートーベンのピアノソナタ月光など。午後一時開演で、入場には整理券が必要。同学院では一般から百人を招待する。入場希望者は電話で、同学院 ☎0798・73・3013まで、二十四日午前一時から受け付けを始め、先着順で定員になり次第締め切る。

『神戸新聞〔阪神版〕』 1995. 4. 21

オーストリアのピアニスト

「復興願い」演奏会

29日に甲陽学院中 被災者ら招く



オーストリアのピアニスト、イヨルク・デームスさん（左）が「復興願い」演奏会を招く。同学院では一九四九年から創立記念音楽会として、この時期に有名演奏家を招いてきた。震災で体育館が避難所になったことから、音楽教師の松井義知さん（右）が「今回は被災者をもつてお招き」と仲間を通じて被災者の方にも應じて話を持ちかけ、デームスさんも快く引き受けた。

「被災地のみさんの励ましになれば」と、同学院は同市香櫨園地区の被災者らを無料招待する。

同学院では、同校と市立香櫨園小学校などに避難している人や周辺の被災者を招待するほか、市民にも先着百人に無料整理券を発行する。申し込みは甲陽学院高校（〒798・73・3013）へ。

『朝日新聞〔阪神版〕』 1995. 4. 25

七 クラブ活動

① 中学校

震災直後は、学校長の指示のもと保護者及び生徒たちの安否を気遣い特に各学年では主任を中心に奔走した。

その後、各学年の連絡網により登校の指示をしたのが一月三〇日(月)のことであった。

二月一日(水)より一〇時始業の四限授業再開となったが、クラブについては下校時の生徒たちの安全確保のため、活動を一時停止することを確認した。

三月になり不自由な学校生活及び登下校時の困難さも徐々に回復され、指導部もクラブ活動再開に向けて再度検討を重ねたが、活動施設のなかには地域の方々が避難場所として使用していただいているクラブの問題、参加生徒への対応について(震災を受けた生徒・通学時間帯)等再開にあたっては、それぞれに支障もあったが慎重に対処し最終的には各顧問の先生方の指導によって三月一日(金)よりクラブ活動を再開した。活動時間については、一四時三〇分終礼より一六時完全下校と決定。また他校

も、それぞれに施設が避難所として使用されている厳しい現状を踏まえ、柔道部は市内の六校を招き三日間に渡り、合同練習を実施した。バスケットボール部も岡先生の努力により他校生徒への施設の開放を試み、三月一二日(五月一四日迄の五日間、神戸市・芦屋市・西宮市のバスケットボール部員(約一五〇名を本校に招き、合同練習を実施し他校生徒との交流を一層深めた。

いよいよ新学期を迎え、交通機関も当初の予定より復旧が進み、始業時間の変更案(九時一〇分始業)が教務より提案され承認された。

それに伴い指導部でも再度クラブ活動の時間帯、下校時間の決定等について部会を持ち、一五時三五分終礼より一六時四〇分まで活動、一七時完全下校、延長クラブについては一七時一〇分まで活動、一七時三〇分完全下校の部案を職員朝礼で提案し承認された。

生徒諸君には、今なお不自由な学校生活のなか一日も早い本来の生活にもどり、音展に向けての文化部活動、汗にまみれ思いきりクラブに専念できる運動部員の勇姿

をと願っている。

また、二期工事の責任者として、進めてきた一度も使用することのできなかった八コースのプール、西校舎の管理棟更には自慢の東校舎等が甚大な被害を受けたが、その復旧工事も法人のご理解と学校長の熱意で急ピッチで進んでいることに一教師として感謝したい。

(大野 哲哉)

② 高等学校

二月一日より授業を再開したものの、このころはまだ余震がひんぱんに発生しており、いざという時どのようなにすれば生徒を安全に誘導できるか、と考えながらの授業であった。午前一〇時に登校、四限の授業を行い、午後二時四〇分の下校開始、三時半ごろ下校完了。とにかく授業が終ればできるだけ早く自宅に帰ること、これも交通機関があちこちで寸断され、通常の二倍も三倍も時間をかけての帰宅である。「当分の間クラブ活動は禁止する」でスタート。

この状態から変化があったのは三月に入ってからで、

交通機関の復旧が進み、夙川―甲陽園開通に伴い、四五分六限授業に拡げた時であった。野球部・剣道部・体育祭企画委員会の三団体から、①四月一日からの春季県大会地区予選にそなえての練習、②四月早々の昇段試験にそなえての練習、③新学期の体育祭準備のため、活動再開の要望があり、次の二つを条件に三月九日(木)より活動を認めた。

○顧問が付添うこと

○午後六時に下校のこと

全クラブが活動を再開したのは三月二十四日の春休みからである。日曜日を除く毎日、午前九時より午後四時まで、ただし三月二十四日は卒業式終了後よりとする。また新学期からは一般生徒の下校は午後五時、クラブ活動の生徒の下校は六時とした。なお六時下校を守れないクラブに対しては警告を行い、二度の警告を受けたクラブは活動を停止する、とした。全クラブ活動再開について以上のことを三月二三日の終業式で生徒に伝えた。

(松井 義知)

八 大学入試

一九九五年度の大学入試センター試験は一月一四日(土)一五日(日)の二日間で無事終了し、翌一六日(月)は振替休日であったが、三年生と関係教職員が登校し、いわゆる「自己採点」を行った。八〇〇点満点の校内平均は六五八点で前年より一二点上まわり、関係者一同ホッと一息ついたところであった。進学資料室では、その日のうちに「進学指導資料」を作成し、午後八時頃下校した。そしてその翌未明、震災に見舞われたのである。

進学資料室では、ロッカーやついたてが倒れガラスが散乱、大きなシェルビングラックは倒れはしなかったものの、の中の資料・書籍は大量に放り出されて床にうず高く積もった。幸いパソコン本体とフロッピーディスクは無事であり、後の進学資料の整備に大きな支障をきたさなかった。前夜作成された「進学指導資料」の冊子も無事に丸テーブルの上に残っていた。とは言え、一七日(火)と一八日(水)に予定されていた「進学指導会議」は開けるはずもなく、「進学指導資料」も直接は使われないことに

なった。

国公立大学の個別学力試験(いわゆる二次試験)への出願の時期が迫っていた。本来ならば「進学指導会議」の内容をふまえ各学級担任が生徒と面談して出願大学学部の決定するべき時期なのであった。しかし、それ程の余裕はなかった。教員も生徒もまず登校がままならないのである。一九日(木)に学校にて三年学年主任妙島先生、三年進学資料室担当川崎先生、進学資料室副室長(「一浪」担当)木林先生の各先生と相談し、調査書の発行・手渡しを最優先することとした。生徒からの問い合わせの電話も増えていた。二三日(月)より調査書を渡す。午前一〇時から午後二時頃に何とかして登校せよ、やむを止ない場合は友人に頼むなどして入手ルートを工夫せよ、との指示で統一した。

二三日(月)より調査書発行、西宮北口駅より徒歩にて登校する者多数。現役生については二五日(水)までにほぼ発行終了、「浪人生」についても二八日(土)頃までにおよそ終了した。文部省からは一月一九日の段階で高等教育局

大学課大学入試室長名で各大学あてに「兵庫県南部地震で被災した受験生等への配慮について」という依頼が出されており、調査書等の書類を提出できない受験生に対しても出願を受け付け、事後書類を提出させるなどの措置をとることを求めている。この情報は二〇日には入手していたのであるが、受験生の心理を思い、できる限り通常の出願手続きを行わせたいと考えて調査書発行を最優先したのである。

例年ならば出願先の決定にあたってあれこれと必要以上に悩みがちなのが受験生というものだが、本年にかぎっては悩む余裕がなかった分、開き直った気持ちで第一志望を貫いた者も多かったように思われる。「行きたい大学に出願する」という原点に立ちかえれたことが、思わぬ副産物であった。しかし一方では、被災によって家庭の事情から地元大学に志望を変更せざるをえなかった例もあり、彼らにとっては準備不足もあってやや不本意な受験となっただろう。

二月から学校の方も再開され、その後のことは例年と

大きく変わらない。結果的に本年の大学合格状況は〈表〉の通りであるが、震災の影響がどのように働いたのかは知るよしもない。ただ我々教職員とはちがって、若い受験生の精神は大変しなやかであり、震災の痛手を克服して受験勉強に打ち込んだ者が多かっただろうと想像している。

なお、国公立大学では被災者のための特例入試（いわゆるD日程入試）が行われた。被災のため出願したものの受験できなかった者を救済する「再試験」、被災により様々なハンデを負った者を救済する「再募集」の二つの類型に分かれたが、後者を採った大学はわずかであったし、その募集人数も基本的には少数にとどまっていた。本校からは、福井大学、京都大学、大阪市立大学、神戸商科大学に一名ずつ特例入試の合格者を得た。

（今西 昭）

大学合格者数一覧

国立大学

大 学	95年度			94年度		
	計	現役	既卒	計	現役	既卒
東 京 大	18	11	7	27	20	7
京 都 大	93	62	31	70	52	18
大 阪 大	15	9	6	27	12	15
神 戸 大	15	12	3	11	4	7
北 海 道 大	2		2	4	2	2
東 北 大				2		2
群 馬 大				1	1	
筑 波 大				2	2	
千 葉 大				1	1	
東京外語大	1		1			
東京工業大	1		1			
電気通信大				1		1
一 橋 大	3	2	1	7	2	5
横浜国立大	1		1			
静 岡 大				1	1	
金 沢 大				3	1	2
福 井 大	1		1	1		1
信 州 大	2		2	1		1
滋賀医科大				1	1	
京都工繊大	2		2			
大阪教育大	1		1			
和 歌 山 大	1		1			
岡 山 大	2		2	1		1
広 島 大				2		2
山 口 大	3	1	2			
徳 島 大	1	1		1	1	
愛 媛 大				1	1	
九 州 大	1	1		1	1	
佐賀医科大	2		2			
琉 球 大	1	1		1	1	
国立大学計	166	100	66	167	103	64

公立大学

大 学	95年度			94年度		
	計	現役	既卒	計	現役	既卒
東京都立大	1	1		2	1	1
横浜市立大				1	1	
金沢美術芸大	1	1				
名古屋市大	5	1	4	2		2
岐阜薬科大	1		1			
京都府立医科大	1	1		4	1	3
大阪市立大	4		4	4		4
大阪府立大	4	2	2	9		9
神戸商科大	2		2	4		4
岡山県立大	1		1	1		1
公立大学計	20	6	14	27	3	24

準大学

準大学	95年度			94年度		
	計	現役	既卒	計	現役	既卒
防衛医科大学校	3	1	2	2	2	
防衛大学校	1		1	1		1
気象大学校				2	1	1
準大学計	4	1	3	5	3	2

私立大学

大 学	95年度			94年度		
	計	現役	既卒	計	現役	既卒
早 稲 田 大	25	9	16	22	6	16
慶應義塾大	27	5	22	32	5	27
同 志 社 大	12	2	10	22	3	19
そ の 他	74	10	64	80	9	71
私立大学計	138	26	112	156	23	133

*合格者数が少数の私立大学については一括して示している

1995年4月14日現在

甲陽学院高等学校進学資料室

九 被災生徒・保護者への支援

1. 学内での支援

① 見舞金等の支給

阪神淡路大震災罹災生徒特別予算設立（学校、育友会、

その他見舞金による）。

支出責任者は校長。

死亡

生徒会・育友会慶弔規定による（中高生徒指

導部長面接）

家屋被害

全壊 二万円・図書券 半壊 一万円

副読本

教材費、その他特別予算から支出。一部出版

社等より寄贈の申し出あり。

② 入学金・授業料の免除

全壊・半壊のうち希望者を対象とし、中高とも中学校

事務長が個別面接の上で決定。授業料は一・二期分免除。

・家屋の全壊・半壊による希望者

中学二七名 高校四八名 計七五名

・その他事業所等の被災による希望者

中学二名 高校二名 計四名

（山本 雅彦）

2. 外部団体からの支援

① 義援金

阪神大震災で全壊・半壊の生徒に対して、救済義援金募集の声が、育友会・教職員・東京甲陽会有志から起った。災害は阪神間の人々全員が被害者であり、学校として、法人（教職員救済実施）として考えたいと思ったので、二月一日、二日と育友会役員会をひらき、被害を受けた「生徒」に対して「阪神大震災災害生徒救済特別会計」を設立。緊急時のため、責任者を校長とし、会計責任者を山本事務長として、高校育友会予備費から一〇〇万円、卒業記念積立金一〇〇万円、中学育友会予備費から一〇〇万円、計三〇〇万円を基礎資金として発足。高校は生徒指導部部長の松井先生、中学は生徒指導部部長の大野先生を責任者として、被害調査によって、個別面接をし、わずかではあるが、お見舞金として、全壊生徒

二万円と図書券、半壊生徒一万円、又学用品などの被害生徒には現物給与した。そして多数のお礼状を戴き恐縮した。その後、他校私学関係者・出版関係者、卒業生から義援金が送られてきた。三〇〇万円の基礎資金も九〇〇万円余となり、今後震災による学資困難生徒も予想されるので、利用させていただきたいと思っている。又この震災によって、多くのことを学んだ。生徒諸君が、水や食料を運び、他校私学の先生方が徒歩でお見舞品を届けてくださったり、人々の思いやりを学んだ。

義援金はすべて生徒特別会計に納入させていただき、別紙のように、理事長、学校長名でお礼状を郵送した。

入学金・授業料など県費・法人費などのご協力で全壊、半壊生徒の希望者には、一部免除されることとなったが、その他震災による県費対象外生徒もいるので、特別会計から負担を考えている。当初不安もあったが多数の方々のご協力により資金もでき、円滑に運営できたことを嬉しく思っている。

(中村 泰三)

〈追記〉

なお、一九九五年三月一日、日本私立中学高等学校連合会より五七五万円、私学ボランティア基金より一〇〇万円、兵庫県私立中学高等学校連合会より四一万円、計七一六万円が義援金として、本校に贈呈された。

また、一九九五年五月三日、マーチリョブリザリミュージック実行委員会より音楽教材の支援寄付金として三八万三六九一円が寄付された。

一九九六年一月二〇日には、公益信託阪神・淡路大震災遺児就学援助基金より平成七年度教育活動助成金として一〇〇万円が助成された。

(山内 英正)

甲陽学院中学校・高等学校 阪神大震災 災害生徒救済特別会計

責 任 者 中村 泰三
会計責任者 山本 雅彦

収入の部

災害生徒特別会計（当初予算 3,000,000円）		（金額）
A	甲陽学院中学校育友会予備費から	1,000,000
B	甲陽学院高等学校育友会予備費から	1,000,000
C	甲陽学院高等学校記念品積立費から	1,000,000
小 計		3,000,000

義援金

1	中学2年保護者	
2	コクヨ	
3	日本生命保険（甲南支店）	
4	日本漢字協会	
5	洛星高校	
6	東大寺学園	
7	代々木アニメ	
8	北橋 健治（OB衆議院議員）	
9	河合塾	
10	学習研究社	
11	甲陽学院教職員一同	
12	福武書店	
13	駿台予備校	
14	近畿日本ツーリスト	
15	増進会出版社	
16	日本ユニホーム	
17	甲陽学院同窓会	
18	卒業生	
19	卒業生	
20	ラサール高校	
21	高校3年育友会有志	
22	京都洛南高校	
23	高校1年保護者	
24	卒業生	
25	高校3年育友会有志	
26	駿台予備校神戸校・大阪校	
27	旺文社	
28	県私学連合会補助（一部）	
小 計		5,971,352
合 計		8,971,352

図書券

29	三和銀行	
30	数研	
小 計		100,000
総 合 計		9,071,352

支出の部

高 校	一部損壊 13 (図書券)	
	全壊 2万×30	600,000
	半壊 1万×47	470,000
中 学	全壊 2万×38	760,000
	半壊 1万×29	290,000
学用品など補助		66,600
図書券補助		110,000
合 計		2,296,600
1995年5月10日現在 残 金		6,774,752

収入の部 (追加)

義援金	
31	八幡平温泉プー太郎村
32	卒業生有志
33	卒業生
34	卒業生有志
1997年1月20日現在 追加合計	
143,000	

甲 陽 学 院 高 等 学 校 様

兵庫県私立中学高等学校連合会
理 事 長 増 谷 勲

兵庫県南部地震に係る義援金の
被災校への贈呈について (ご連絡)

兵庫県南部地震による私立中学高等学校の被害は極めて大きく、その被害額も日を追って増大しております。被災されました学校に対しまして衷心よりお見舞い申し上げます。

地震発生以来、被災されました学校に対しまして、関係各方面から各般にわたって多大のご支援をいただいておりますが、なかでも、日本私立中学高等学校連合会を初めとして、全国の私立中学高等学校から多額の義援金等を数々の働きのお音聲と共に頂戴いたしました。

本連合会としては、これらの義援金等に対しまして、心より感謝し、誠意をもって御礼を申し上げて参ったところですが、現在のところ全国からお送り頂いております義援金等の総額につきましては、次のとおりです。

① 日本私立中学高等学校連合会	230,220,000円
② 同上私学ボランティア基金	24,300,000円
③ 兵庫県私立中学高等学校連合会	14,407,490円
(" " 他に Tシャツ	600枚)
総 計	268,927,490円

(後略)

② 奨学金

大震災によって被害を被った生徒に対して、特に災害遺児となった生徒に対して、各市あるいは日本育英会・あしなが育英会・NHK厚生文化事業団神戸新聞社などの団体から奨学生の募集があった。

高校

あしなが育英会

NHK阪神淡路大震災遺児育英会

神戸新聞社「くすのき基金」

神戸市被災生徒修学援助金奨学生

わかば奨学金

あしなが育英会大学奨学生予約

1 3 1 3 3 1

(妙島 秋男)

③ 現物援助

マスク六〇〇個

薬品類

日本赤十字社兵庫県支部
兵庫県私学総連合会

(前者は一九九五年三月、後者は五月)

(栗原 純子)

小(コ)りや子(こ)りに負けないで!

～自分の健康は自分で守ろう～

★外に出るときは、マスクをしましょう

★外から帰ったら、うがいをして、

きれいな水で

目を洗いましょう



★目にゴミが入ったときは、こすらずに、

まぶたをつまんで少し引き上げ、

涙といっしょに流すか、

きれいな水で洗い流しましょう



※どうしてもゴミがとれないときは、

先生や家族の人に言って、

医師の診察を受けましょう

✦ 日本赤十字社兵庫県支部
災害対策本部中央校援ステーション付ボランティア
〒650 神戸市中央区下山手通5-6-22
Tel. 078 (321) 3751

④ 激励の手紙

東京都世田谷区立富士中学校とマニラ日本人学校より、一九九五年二月に激励の手紙が届いた。

被災者のみなさんへ

この度の地震では、とても大変だった
ことと思います。

寒さの厳しい中で避難生活をしている
と、かぜをひいたりして、苦勞もタ
いかと思います。

今は授業どころではないと思いますが、
気を落とさないで、1からスタートして
下さい。

心から応援しております。

世田谷区立
富士中学校 三年代表

甲陽学院 中学校生徒会のみみなさまへ

壊れてしまった家、燃えてしまった町並み、そして体育館や校庭などに避難する人々。テレビに映し出される映像は想像を超えるものばかりでした。

わたしたちは、1月17日の大震災をフィリピンのマニラで衛星放送を通して知りました。目を追って死者が増え続け、5千人以上の人が亡くなったということは、みなさんの学校の仲間や家族、あるいは親戚の方々にも亡くなった方がいらしたのではないかと考えると、とても胸が痛みます。

また、毎日何時間も刻々と伝えられるニュースの画面を見ているだけでも、被災者の方々の苦勞や、家族や親戚を亡くされた方々の悲しみがひしひしと伝わってきます。新聞で解れた校舎の写真を見たり、テレビのニュースで避難所になっている校舎や体育館の中の様子を見ると、いつ授業が始まるのだろうと心配せずにはいられません。みなさんには、いろいろな苦勞があって、大変つらい毎日を送っている、しることを思います。

マニラ日本人学校にも兵庫県出身の仲間がいます。1月末の運動会が終わってから、私たちマニラ日本人学校児童生徒会は阪神大震災で被害にあわれた小中学校の児童会や生徒会のみみなさんに対して何ができるだろうかということをクラスで話し合いました。その結果、マニラ日本人会という大人の団体では義援金を集めているので、児童生徒会では大人と違、たこととして、大震災の被害にあわれた兵庫県内の約450校の小中学校の児童会や生徒会のみみなさんに励ましの便りを書くということになりました。

みなさんにおかけする言葉はなかなか見つからず、マニラに住む私たちの力では今は何もしてあげられることはありませんが、くじけずにがんばってください。勉強も十分にできず、まして遊べる余裕などはない毎日だと思いますが、みなさんが1日でも早く笑顔で登校でき、元気に学校生活が送られるようにマニラ日本人学校児童生徒会408名全員が心から祈っております。

みなさん、がんばってください！

平成7年2月10日

マニラ日本人学校児童生徒会中学部・会員一同

MANILA JAPANESE SCHOOL
ATTACHED TO THE EMBASSY OF JAPAN
BARANGAY DON BOSCO, LEVITOWN SUBDIVISION
PASAYCUE, METRO MANILA, PHILIPPINES

児童生徒会

662

兵庫県 西宮市中葭原町 2・15
甲陽学院 生徒会 会員一同様

十 奥野正弘君追悼

奥野正弘君のご霊前に

中学校第一学年主任 池田 辰彦

小説『太陽の子』の読書感想に「お父さんは死んでしまったが、ふうちゃんはずい大人になると思う。」と書いていた正弘君が、ご両親とともに天に召されるとは、ご逝去の報に接して言葉がありません。姉上様、叔母様にお会いした折も、何も申せませんでした。

日ごろ豪放な中村校長先生が、君のことに話が及ぶと、嗚咽なざったり絶句なざったりする場面に何度も出会いました。将来ある有能な教え子を失った悲しみは、校長先生初め、甲陽学院の教師の等しくいだいているものです。

担任の森口先生は、悲しみのなかで巻頭言の筆を執りました。田中先生はこの文集の装丁、製本をしました。有馬先生は表紙の題字を書きました。藤田先生は祥福寺へ君の遺影をお届けし、下見をしました。河田先生は、岡先生と一緒にご本葬当日の生徒の引率の計画を練りま

した。教頭の石川先生は育友会の方々との連絡などにあたってくださいました。すべての先生が、心から君を惜しみ、お力を貸してくれました。

私は、授業の中で、追悼文集の制作を呼びかけました。君のご人徳でしょうか、かけがえのない仲間を失ったみんなは、必死になって筆を執りました。欠席の子もいますが、めいめいが震災の経験ふり返り、やさしく聡明な君との別れを惜しんでいます。どうか読んでください。

正弘君、ご両親様、どうかやすらかに眠ってください。ささやかな文集を姉上万都里様におあずけして、君のご霊前に捧げさせていただきます。

(平成七年三月四日)

一年C組 三木 崇史

ぼくは、一学期のころはあまり奥野君とは親しくありませんでした。だけど二学期の初めの席がえではじめて奥野君と近くなり、いろいろ話したりしているうちに親しくなりました。それから今までずっといっしょに遊ん

だり、帰ったりしていました。帰り道でよく遊んだりしてとても楽しかったです。帰りの電車はぼくと奥野君とはちがう電車だったので、ときどきどちらかがちがう電車に乗っていっしょに帰ったりしていました。

奥野君はバスケットボールが好きだったけど、部活には入っていないくて、ぼくは陸上部だけどあまり練習する日が少ないので、みんなが部活をやっている時に二人だけで帰っていました。でも部活がないときは大勢の人数で帰っていました。

一月一四日は部活があつたので二人だけで帰っていました。その日は奥野君がぼくの乗る電車の方へ来ていっしょに帰りました。別れる時はいつものとおり『バイバイ』といって別れました。それが最後の別れになるとは思いませんでした。

地震があつて、ちょっとおさまったところに奥野君が亡くなったことを知ってとてもつらい思いをしました。親友をなくすということは本当につらいものだと思います。だけど奥野君がどんなに遠い所へ行っても、ぼくが

奥野君の親友だということは、忘れないでほしいと思います。

奥野君を悼んで

一年C組 村瀬 武史

最初に連絡網で、奥野君がお亡くなりになったと聞いて、本当にびっくりしました。そして、後日にすぐに救出されていたら、御存命の見込みがあつたと聞き、お姉さんは、どれだけ悲しい気持ちで、救出隊が来るのを待っていたのだろうと考えましたが、全然私には分からな

いほどの、悲しい気持ちだったと思います。

私はサッカー部で、奥野君はあまり長く続けなかったので、あまりくわしくは覚えていないんですけど、楽しそうにサッカーをしていたと思います。それから、私も奥野君も、他の友達としゃべる様になって、あまり話す機会がなかったけど、私が部活を病気で休んで帰る時に、奥野君といっしょに帰る時には、楽しく話しながら帰りました。鉢伏高原のスタンプでは、友達をおぶっ

て走るという事をやり、途中でこけてしまい、結果は三位だったけど、本当に楽しそうにがんばっていました。

この阪神大震災が起こる四日前の一月一日三日に行われた球技大会では、チームがちがうけど、サッカーに出ていました。私がすぐに思い出せるだけでもこれだけの事を、最後までがんばってやり通していました。

今まで、約一〇ヶ月間ほど、共に勉強し、色々な行事に参加した仲間が亡くなったというのは、本当に悲しい事だと思います。私も、亡くなってしまった奥野君のためにもがんばって、これからの人生を歩んで行こうと思いますので、お姉さんも、がんばってこれからの人生を歩んで下さい。

追悼

一年C組 服部 峻

この度の震災で奥野くんを含め、ご両親をなくされたお姉さんにおくやみ申し上げます。ぼくは知っているかぎり奥野くんのことをお伝えできればお姉さんもお喜

びになられると思います。

ぼくは塾で初めて奥野くんに会いました。奥野くんとは最初同じ一組だったので親しかったです。奥野くんはテストでワーストに入ってしまったと泣いてしまうことが何回かありました。でも、逆にベストに入った時は、とても喜んでいました。それから三月三日の合格発表では奥野くんには会えませんでしたが大変喜ばれたことと思います。

中学に入って、サッカー部に入った奥野くんとぼくはいつもいっしょに練習しました。奥野くんも毎日の練習がとても楽しそうでした。けれども、原因はよく知りませんが、奥野くんが急に部活をやめたしまった時は、どうしたのかと心配しました。そのころから、奥野くんとはあまりしゃべらなくなりました。

夏休みに入っすぐ、ぼくたち一年は鉢高原に合宿に行きました。その時、ぼくはまた奥野くんと同じ班になりました。鉢高原では魚をつったり、山に登ったりしました。また、トランプやゲームなどをして楽しく過ごし

ました。出し物では、奥野くんは競馬の乗る役をしてとてもはしゃいでいました。

それから、一〇月に奥野くんとぼくと友達二人と一緒に宝塚ファミリーランドに行きました。そこではジェットコースターといった乗り物に乗ったり、ゲームセンターで遊んだりしました。四人でバスケットゲームを競いあったりもしました。そのゲームでぼくが勝ったので奥野くんはとてもくやしそうでした。

学校で奥野くんは、友達と古今東西などの遊びをして休み時間を過ごしていました。また、昼休みには、ぼくたちといっしょにバスケットをして楽しみました。

一月一七日の大震災で五〇〇人以上もの人々がなくなりました。自分の友達がその中に入ってしまうなんて思いにもありませんでした。お姉さんはとても悲しくつらいでしょうが、これからはがんばって下さい。

奥野正弘君を悼んで

一年C組 笹野 遼平

私が奥野君と親しくなったのは、学校の行き帰りに一緒にになったことからでした。私が朝御影で特急から普通に乗換えると、その普通に奥野君が乗っていることが多かったのです。こうして帰日も一緒に帰るようになり、学校でも遊んだり話したりするようになったのです。

私の奥野君に対する印象を一言で言う、温厚な人というものです。奥野君が怒ったところはほとんど見たことがありません。でも、けっして無口というわけではありません。試験のことや、前日に見たテレビ番組のことなど、いろいろと話してくれた楽しそうな奥野君の姿が目には浮かんできます。

三学期の席替えでは、奥野君や他の二、三人の友達と一緒に五、六列目を選んで希望し、くじ引きの結果、隣同士になりました。仲の良い友達が隣になって喜んでいたので、それから五日目にあの地震が起こってしまいました。もう、奥野君と机を並べて勉強したり、おしゃべ

りをしたりすることはできないのだと思うと、何か信じられない、淋しい気持で一杯です。

奥野君、どうか安らかに眠って下さい。

奥野君の思い出

一年C組 稲田 忍

私は音楽の時間奥野君のとなりの席でした。奥野君とは、そんなに長い付き合いではなかったけれどそれなりにけっこう親しかったと思っています。始めはあまり知り合いではなかったのに、けっこう話しかけてきてくれたり僕がノートを写しきれなかった時に自分のノートを見せてくれたりしてもらいました。音楽の時のリコーダーの練習で奥野君は自由練習ではけっこううまいけど一人一人やらせる時は必ずといって良いほどまちがって後で僕にちょっと恥ずかしそうに笑いながら「緊張してしまった」と言いました。僕もよくまちがうのでなんか奥野君がそういうと、僕も安心して親近感が持てました。また時には昼休みに一緒にバスケットボールをして

遊んだ事もありました。奥野君はロングシュートがけっこう上手でした。バスケットボールをする時は奥野君と同じチームになった事は一度もなかったけど敵から見れば見かけによらず、かなり根性がある様に思いました。そんな奥野君があの一瞬にして起きた地震で亡くなったということが今でも信じられません。奥野君とはいつまでも仲間としてがんばっていきただけです。奥野君安らかに眠って下さい。

奥野正弘君を悼んで

一年C組 石塚 洋

今回の大地震はよび名が阪神大震災に変わってしまったほど、とてつもなくおそろしいものでした。私の家は北区でそれほど被害はありませんでした。それでもテレビ等の情報で山の下の方の被害が分かってきて、胸のいたむ思いでした。同じ神戸でこんなにも被害の違いがあるのだな、と思いました。日をますごとに増えるなくなつた人々のなかに、まさか親友の奥野君の名前があるとは

ゆめにも思いませんでした。

私が奥野君と初めて会ったのは入学式の時、つまり学校に入るまで一度も会ったことはなかったのです。ハチ高原へ行った時も全く違う班でした。それがなぜ急に仲良くなったのでしょうか。それは二学期後半の席がえをしてからでした。その席がえで私は奥野君となりどうしになりました。それまでも地理の時間はとなりどうしでしたが、H R教室ではじめてでした。そのころから奥野君と親しくなりだしました。そしてとても仲良くなったのですが、まさか一月一四日に会ったのが最期だとは思いませんでした。

今日、二月二三日、池田先生にくだしいことを聞き、あと少し救助が早ければ奥野君はたすかっていたかもしれないと思いました。本当に残念です。でも絶対に奥野君のことは忘れません。短かったけれども一緒にいた期間は忘れません。やすらかに眠って下さい。

さようなら 奥野君

奥野正弘君、笑顔を忘れずに

C組担任 森口 匡

昨年の春、満開の桜が土手を彩る夙川の河畔で、あなたは人生最良の日を迎えられました。幾多の困難を乗り越え、不屈の精神と人一倍の努力により、この新築されたばかりの甲陽学院中学校へ、一六五名の新入生の一人として、入学されたのです。私は入学式のあとの挨拶の中で次のように申し上げました。「皆さんの今日の笑顔を、六年間ずっと忘れないでほしい。」

正弘君、あなたは多くの良き友に囲まれ、日夜勉学に励まれ、甲陽生の優秀な一員として、充実した毎日をごされていました。私はあなたが怒っているところを見たことがあります。あなたは常に笑顔で周りの人々の心を和やかにしてくれました。あなたの笑顔こそ、私がずっと忘れないでほしいと願ったもののそのものだったのです。

正弘君、あなたが一〇か月の間過された校舎はだいぶ傷んでしまいました。あなたが住んでいた美しい神戸の

街並みも今となってはもう見る事ができません。あなたはお父様、お母様と共に雲の上からこの変わり果てた地上の様子をごらんになっていることでしょう。私たちは生き残った者は、ようやく学校の再建、街の復興に一歩ふみ出そうとしているところです。どうかこのせまくてよごれた地上であくせくもがいている私たちを見捨てないで、時には叱り、時には励まして下さい。お願いします。そして天国でお父様、お母様をいつまでも大切に上げて下さい。最後に、あなたのことを一番心配して下さったお姉様を守ってあげて下さい。すばらしい笑顔をお忘れしないで下さい。

弔辞

奥野正弘君、震災の日から四十日以上の時が流れ、甲陽学院の前庭に紅梅が美しく咲く頃となりました。まだ水道もガスも使えない校舎ですが、遠くへ避難していた友だちも帰ってきて、元気な学校生活がもどってきました。

しかし、一年C組の教室に、君は帰ってきません。教室のちょうど真ん中に、花が飾られていて、君の机があります。何度も、夢であってほしいと思いました。校長先生のお話があり黙祷をささげた時も、そう思いました。

君の笑顔はこんなにはつきり浮かぶのに、君は帰ってきません。

正弘君、君は、とてもおだやかで、やさしい友でした。ノートを取りそなたになった人に自分のノートを見せてあげていた姿が、浮かびます。待ち時間が長くなるのもかわず、友だちと帰るために待ち続けていた姿が、浮かびます。相手の話にじっと最後まで真剣に耳を傾けていた姿も、浮かんできます。君の怒った顔は、とうとう見たことがありますでした。

君は、楽しむこと、遊ぶことも、得意でした。

去年の夏の鉢伏高原合宿のスタンプでは、君は、たしか競馬の馬の役でしたね。友だちをおぶって走る途中でころんでしまいましたか、かえって、それがうけて、三

位になりましたね。

休み時間には、教室の隣のロッカールームで、先生に見つからないようにして、鬼ごっこやサッカーもしましたね。

君はスポーツが得意でした。サッカー部時代の練習では、毎日を楽しみながら汗を流していました。一月の校内球技大会では、サッカーチームで出場し、優勝はできなかったのですが、力いっぱい戦い、みんなで楽しめましたね。また、君は、バスケットボールが大好きで、あざやかなロングシュートを決めて、相手をくやしがらせました。

入学式のあと、担任の森口先生は、私たちにこうおっしゃいました。

「君たちの今日の笑顔を、六年間ずっと忘れないでほしい」と。

奥野君、ほんとうに君は、先生の言葉そのままに、笑顔の印象的な、あたたかい友でした。

なのに、正弘君「六年間」という約束なのに、君は、

いま、私たちを置いて旅立ってしまったのですね。

将来、医学を学んで、内科の専門医師になりたいと言っていた君の胸の中には、僕たちに話してくれる大きな、大きな夢が、いっぱいはずんでいたのではないのでしょうか。

大震災は、阪神間や神戸の美しい街並みをこわし、甲陽学院では校舎をいため、六人の生徒・保護者の方々の尊い命を奪い、一〇〇戸以上の家々を全・半壊にし、明るく元気だった君を、いきなり天国に召していきました。

君と私たちは、将来の甲陽学院八一回生として羽ばたくことを誓いあった仲間です。だんだんむずかしくなってきた勉強も、二年生の大山登山も、三年生のスキー実習も、そして体育大会や音展も、君と一緒にやっていきなかったです。

大震災というきびしい経験は、私たちのものの見方を変え、いつそう新しい学問や仕事を生み出すことと思います。

でも、私たちの結び目は、決して震災に負けはしませ

ん。

君の語ってくれた理想をいつも思い起こしながら、先生がたの教えを大切に、力をこめて、さまざまなことを学びたいと思います。

奥野正弘君、ならびに

ご両親様

どうぞ安らかにやすみになってください。

そして、私たち甲陽生にこれからの歩みを、いつまでも、いつまでも、見守っててください。

平成七年三月四日

学校法人 辰馬育英会

甲陽学院中学校生徒代表 正部雄一郎

*「君たちの笑顔は忘れない 1」(『読売新聞』一九九五年

三月七日)に、奥野正弘君の記事が掲載されている。



*著者の栗野仁雄氏は、本校五六回卒業、共同通信社記者。

第六章の一四四―一五七頁に、奥野家葬儀の記事がある。

(『瓦礫の中の群像』東京経済、一九九五年二月六日)。



甲陽学院中学校の生徒のみなさんへ

奥野万都里

本日は、弟奥野正弘のために御参列いただきましてありがとうございます。

弟はちょうど一年前、みなさんと同じ様に、甲陽学院中学校の合格通知を手に入れました。まるで自分の事に感激し、喜びで眠れなかった事を昨日の事に覚えています。

それから一年、こんな不幸が待っているとは想像もしておりませんでした。とても優しく、お心強いみなさんに囲まれ、弟にとって甲陽学院中学校での一年は大変有意義なものであったと思います。

みなさんにとって、人との別れ、そして死、自然の恐ろしさを目の当たりにされたことは、大変厳しい現実ではありますが、それを乗り越えられ又バネにされて活躍していただきたいと思っています。

これからも御家族の皆様そして先生方の期待にこたえられ、そして何よりも自分自身の目標達成のために頑張

つていかれますことを心より願っております。

本日はどうもありがとうございます。

追伸

かしこ

文集を作ってくださいたみなさんへ

大変心暖まる手づくりの文集をいただきどうもありがとうございます。

みなさんと弟との思い出の一つとして大切にさせていただきます。

平成七年三月四日（土）

自分新聞
発行所
東京市
墨田区
新大塚
59年
4月16日

ぼくの夢は――

ぼくの夢は、医者になる
ことです。
医者になれるのなら、内科
なりたいです。(外科は、
人の体の中を見なくては
いけないから)。
医者になるためには、も
のすごく勉強しなければ
ならないから、がんばりた
いと思います。

自己紹介

名前↓奥野正弘

生年 月 日
昭和56年12月21日

血液型
↓
O型

星座

味 ↓ サッカリ



家族紹介

ぼくの家には、

お父さん、やしいです。剣道をしていす。

ふみ
市
ヤ
人
合
サ
し
い
け
と
キ
マ
レ
い

大の石前ナッ

かいます。キーと言います。

ダンカ
ほいではな

不幸な
一日

毎にカハ 人オ	起まら海 かちウチ かハ
おた。また 女ガ 不幸な一 日だっ た おまい	事ハカ はあした キニシ 5000有 の車ヲ ばため バツ
おもしうくな い	3つにた れた 田 リ ヒ テ けがを かんた。 大

(甲陽) 中でやりたハコト

甲陽はスリところだから勉強を
がんばりたが、スポーツもがんばり

十一 地域とのかかわり

1. 避難所開設

一月一七日午後三時頃、避難所となっている香櫨園小学校がいっぱいではないということを通りがかりの男性に聞く。甲陽学院中学校も避難所にすべきではと考え中学校へ。校長先生は学校を出られたすぐ後で山本事務長に相談、校長先生とは連絡がつかず石川教頭（現高校教頭）に連絡がつき、「すぐにでも避難所として開放するように」と了解をもらう。大野先生、岡先生に連絡、

岡先生とともに香櫨園小学校へ本校体育館を避難所として開放するむねを伝えに向かう。小学校ももういっぱいの状態であった。本校体育館に帰って来ると大野先生が「タミのひいてある柔道場がいいのでは」ということでまず柔道場を開放。しかしすぐにいっぱいになり続いて体育館も開放。午後四時半頃電気がつく。ガラスが割れ水びたしになっている体育準備室を岡・岡本・岩見先生がたまたまテレビを避難された人達に開放、我々もラジオで状況はひどいとは思っていたがその時テレビ

での映像には愕然。その時はこの避難所が三月二六日まで続くとは考えられなかった。この日約二〇名が夙東公民館に移動した。

本校避難者の最多数は約二六〇人。すべて自治組織によって行動してもらった。対応はすべて中学校事務長が行い、特に問題は起こらなかった。小学校に本部が置かれていたので場所を提供したのにとどまる。しかし初期においてはトイレ清掃が大変であった。

（上島 彰）

「香櫨園小学校に入りきれなくなった大勢の住民の方が、そこまできておられます。体育館に避難させてあげましょう。いいでしょう?」。岡・上島両先生が息せき切って、事務室へとんでこられた。地震発生直後より伝わるテレビでの情報、西の空を覆う黒煙、辰馬理事長が来校され、前理事長宅及び校医森先生宅の倒壊、阪急電鉄のガード落下等々次々と伝わる大惨事発生ニュースからして、ひょっとしたら、施設提供もあるかと予想は

していたが、まさかこんなに早くとは思ってもみなかった。至急電話にて中村校長の了解をとり、（不思議に電話が直ぐにつながった）「何も手助けすることはできないが、体育館で寝泊まりしていただくことは結構です」と返事。地震発生当日（一月一七日午後三時半ごろ）から当校体育館に、主として森具地区で、家屋の倒壊または余震を心配した二六一名の方が、避難生活を送られることとなった。その時すでに、香櫨園小学校、大谷美術館、公民館には、約一、八〇〇名の避難者がつめかけ、満員の状態だった。

当校の避難者全員を統括されるのは、弓場町自治会々長の阪下氏に決まり、全て阪下氏を通じて連絡をとり合うこととなった。私からは「お願い」としては、タバコの火の始末を完全にとぐらいで、当方としても、避難者としても、全く初めての経験であり、今後どのようなことが起こるのかもわからなかった。ライフラインが完全に絶たれ、厳寒の候でもあり、寒さが身に沁むのを避けることは出来ないが、幸いにも柔道場には畳が敷

いてあり、幾分でも寒さがしのげたのではないかとも思った。（後になって避難の方々から、タタミのことでは、大いに感謝された。）幸いにも電気はその日の夕方から点灯した。

次の日からは、予想通り、避難された方への安否を尋ねる電話が数多くかかり、その取次ぎに忙殺された。当校の教職員・生徒の安否確認、平成七年度入学試験実施に関する問い合わせの電話で、ベルが鳴り続いていたのが、昨日のことのように思い出される。

避難本部は、香櫨園小学校にあり、食べ物、全て本部に取り行く。寒い時期に暖かいものが口に出来ず、がまんの連続であったように聞いた。さらに質・量共に満足の出来るものではなかったが、余震の恐怖におののき、震災の被害の大きさがわかるにつれて、不足を言える状態ではなく、「がまん」の避難生活も止むなしと覚^さられたようだ。

早速に困ったのが、排便の問題だった。水道は止まっている。水洗式トイレが全てであるため、排便の後処理

ができず、避難者は使用禁止を頼んだ調理担当者専用トイレまで、汚す始末だった。小さな貯水槽より汲んだ水で、処理を頼んだのだが、水不足が災いしてか、その汚れ方はかなりヒドかった。新設されたプールの水も使っていたが、破損による漏水のため、一月一九日の夜には、完全にカラになっていた。早速本部に生活用水の確保を頼んだところ、大阪の建設業者がボランティアとして来校され、大型の貯水タンクをおいてその要求を満たして下さった。それ以外に、各地よりのボランティア（企業の男女社員、大学生等）が、交替で親身になって、避難者の世話にあたっていた。汚れ仕事であるトイレの掃除に懸命に従事され、汚れはほとんどみられなくなった。

二月一日より変則ながらも授業が再開されたが、避難生活を送っておられる近隣の方々にも配慮しての学校運営であった。私学とはいえ、甲陽学院は「地域の学校」であることを改めて認識させられた。馬場市長も来校されて、「私立の御校にまで無理をお願いして誠に申し訳ない。感謝しています。要望事項があればどん／＼私に申

し出て欲しい」と謝辞を述べられた。

避難者は、短期間しか当校施設の提供はないものと思っておられたようだが、行政による援助対策は予定通りには進まず、二ヶ月を過ぎても残っておられる方は六〇名余を数えた。しかし、水道・ガス等のライフラインの復旧や余震の心配が減り、仮設住宅の建設が徐々に進むと、避難者は逐次減少していった。

その時期に、西宮市災害対策本部より、避難施設の所有者あてに、「民間避難施設に対する今後の意向調査」があった。「避難施設としての現状を、いつまで続けられますか」「それ以降について、どのようにお考えですか。（具体的に記入下さい。理由等）」との答えにくい質問があったが、特に具体的な意向を書かずに提出した。その後、災害対策本部で避難所の統廃合が必要と考えられ、三月二六日（日）に、当校に避難されていた全員が夙東公民館へ移っていかれた。三月二八日には、本部の香櫨園小学校塚西校長はじめ、阪下自治会長、地区代表の方が御礼を述べて、来校された。

約七十日間、避難者には恐さと不自由さの毎日ではあったろうが、大した事故もなく、病人も出なかったことに幸福を感じ、避難されていた皆様には、今後共々くぐれもお体には留意され、一日も早い復興を祈るのみである。お世話にあたられた阪下会長、ボランティアの皆様にはご苦労さまでしたを申し上げて、報告を終らせていただく。

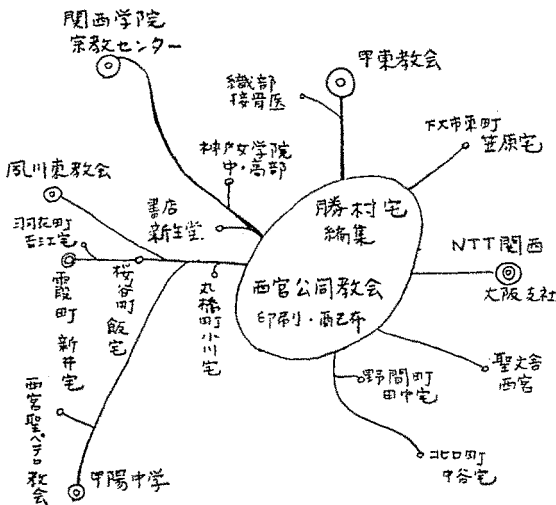
蛇足ながら、平成七年五月初旬には、西宮市地域復興課より、「避難所に対する謝礼金」として、金六九万二千円也が給付されたことを付け加えておく。また、本校に感謝状とテレホンカードが贈られた。

(山本 雅彦)

五月四・五・六日の夜には、本校四六回卒業生の勝村弘也氏らのボランティアグループ約二〇名が、体育館前にテントを張り支援基地として使用した。勝村氏は避難所として使用されていた中学校の体育館へ、自ら主筆・編集の『門戸東地区ニュース』や『西宮震災地の声』を

持参配布した。体育館の卓球場には、震災関係の様々なチラシやビラが置かれていたので、出来る限り収集に努めた。

(山内 英正)



西宮震災地の声の情報ネットワーク 2月1日現在

『西宮震災地の声』創刊号 1995.2.2



第 35 回

卒業証書授与式

平成 7 (1995) 年 3 月 20 日 (月) 午前 3 時 30 分より
 西宮市立香櫨園小学校 講堂



校 歌

作詞 香川 賢治
 作曲 中西 寛

1. 卒業生はるかに涙が止
 武庫の山 (山) けり
 緑の 葉が
 ひびきあふ
 光栄の道は 鳴り鳴ら
 おもひ多き 香櫨園
2. 楓はさく 空たけに 赤き
 夢の道 ぬく ぬく
 夢の道 ぬく ぬく
 空たけに 鳴り鳴ら
 おもひ多き 香櫨園

式 次 第

1. 開式の言葉
2. 校歌斉唱
3. 卒業証書授与
4. 卒業証書授与
5. 卒業証書授与
6. 卒業証書授与
7. 閉式の言葉

卒業生入場

卒業生退場

門 出

西宮市立香櫨園小学校



2. 校舎使用

香櫨園小学校の体育館には避難者が多数居たため、三月二〇日の卒業式と四月七日の入学式は甲陽学院中学校の講堂で行われた。

また五月一三日には、香櫨園森具地区まちづくり協議会総会が中学校の講堂で行われた。

(山内 英正)



友愛ニュース

(1995年)

平成 7 年 3 月 25 日



返せ！ 戻せ！ と叫びたい。いくら叫んでも もどらないものを たくさん失いました。「地球より重たい」と たえられないものまで……。木の芽のふくらみとともに 学校にも明るさがもどってきました。新芽が あちこちに 芽生えています。多くの方々のお世話をになりました。おかげさまで 次年度への希望を持ちつつ、平成 6 年度を終えることができます。

地域の皆さま ありがとうございます
 PTAの皆さま ありがとうございます
 香櫨園幼稚園の皆さま ありがとうございます
 甲陽学院中学校の皆さま ありがとうございます
 ボランティアの皆さま ありがとうございます
 仮転学させていただきました学校の皆さま ありがとうございます
 ご支援いただきました全国の皆さま ありがとうございます
 おたよりいただきました全世界の皆さま ありがとうございます
 ありがとうございます



○平成 7 年度 (1995 年) 始業式 4 月 6 日 (木) 8:30 - 本校 運動場
 入学式 4 月 7 日 (金) 14:00 - 甲陽学院中学校講堂

『あゆみ (通知表)』について
 今学期は、震災による臨時休業があり、両学期も合併授業をせざるを得ませんでした。しかし、子どもたちは懸命に学び、たくさんのごことを身に付けました。
 『あゆみ』は、そうした子どもたちの姿を評価しております。仮転学等の期間の長い子どもたちについては、一部 (評価できません) としている場合もあります。ご了承の程をお願いします。

西宮市立香櫨園小学校



プログラム

香園園森地区まちづくり協議会総会

とき 平成7年5月13日(土)

午後2時～4時

ところ 中陽学院中学校 講堂

(司会) 実行委員 地村 幸夫

(熟練)

全員

- | | | |
|------------------------------|----------|-----------|
| 1 開会あいさつ | 会 長 | 阪 下 直 雄 |
| 2 来賓あいさつ | 西宮市都市復興局 | |
| | 局 長 | 中 馬 進 |
| 3 経過報告 | 実行委員 | 南 野 雄 二 |
| 4 街区委員の紹介 | | |
| 5 復興共同住宅への不安と思い
および勉強会の提案 | 実行委員 | 小 川 裕 三 |
| 6 まちづくりアンケートの概観 | 実行委員 | 長 谷 川 純 一 |
| 7 協議会に対する質疑 | | 会場から任意に |
| 8 閉会あいさつ | 副 会 長 | 木 村 嘉 三 郎 |

『毎日新聞〔阪神版〕』 1995. 5. 14



阪神大震災で大きな被害を受けた地区では、復興事業に指定されている西宮市の森員地区の住民で、この「香園園森地区まちづくり協議会」(阪下直雄会長)の第一回総会が十三日、西宮市中陽学院の早陽学院中学校で開かれ、同協議会発足の経緯や同協議会が住民に対して実施したアンケート結果などが報告された上、集まった二十一人が協議会に加入した。

協議会には現在、森員地区に住んでいる住民のほか、白毛やマンションが建設されている住民ら約二百人が集まった。大震災に遭っている住民ら約二百人が集まった。大震災に遭っている住民ら約二百人が集まった。

協議会には現在、森員地区に住んでいる住民のほか、白毛やマンションが建設されている住民ら約二百人が集まった。大震災に遭っている住民ら約二百人が集まった。

協議会には現在、森員地区に住んでいる住民のほか、白毛やマンションが建設されている住民ら約二百人が集まった。大震災に遭っている住民ら約二百人が集まった。

協議会には現在、森員地区に住んでいる住民のほか、白毛やマンションが建設されている住民ら約二百人が集まった。大震災に遭っている住民ら約二百人が集まった。

『読売新聞〔阪神版〕』 1995. 5. 14

現況を話し合ったほか、今後の情報交換を交換し合っていることを確認した。

西宮・森員地区まちづくり協議会

20人参加し初総会

西宮市の土地区画整理事業に地域の声を反映させようとする地元住民ら約二十人が、十三日、私立中陽学院中学校講堂で、地区住民約二百人が参加して開かれた。

阪下直雄は、精神的に市側と折衝、交渉して、明るく楽しい町づくりを進めたい。そのために、みなさんも意見を協議会に出すのがいいと活動への積極参加を呼びかけた。

機関紙の発行で、住民の要望を把握するためのアンケート実施など、これまで取り組んできた活動の報告があり、区画整理についての勉強会の開催を提案。また地区住民連帯の活動にかかわる事例は、協議会として市に要望する。基本的な住民全員の参加を活動を進める。市への要望は住民アンケートに基づいて行う。

同協議会は、四月十六日に発足。地区内三町の自治会長らが中心となって活動を進めてきた。

3. グランド開放

香櫨園小学校のグラウンドに仮設校舎が建てていたため、一九九五年度の二学期以降、第二・第四日曜日には香櫨園体育振興会に中学校のグラウンドの使用を認め、サッカーとラグビーの練習が行われている。また第一日曜日には軟式少年野球連盟が使用している。

園児からお年寄りまで参加 復興へ力合わそう運動会

22日、甲陽学院中グラウンドで

香櫨園地区住民

阪神大震災で大きな被害を受けた、土地区画整理事業区域に指定されている西宮市の香櫨園地区の住民が、二十日に同市甲陽学院中

甲陽学院中グラウンドで復興元気を高める第一歩として、第二十三回香櫨園地区運動会（同地区体育振興会主催）を開く。今年は復興へ向けてさらに力を合わせようとの趣旨で、主催者は幼稚園児からお年寄りまで多くの住民の参加を呼びかけている。入場無料。

毎年一回、香櫨園小学校区の一町の住民を対象に開いている。今年は同校のグラウンドに仮設校舎が建てられないため、同学院グラウンドで開くことになった。運動会ではミニバレー、ボウリング、親子ラレー競争などを予定している。午前十時から午後三時まで、雨天中止。

『毎日新聞〔阪神版〕』 1995. 10. 10

六月一八日には香櫨園地区ソフトボール大会が、一〇月二二日には第三三回香櫨園地区大運動会が催された。なお、一九九六年には一〇月一三日に、第三四回香櫨園地区大運動会が催された。

避難者参加し運動会

西宮・香櫨園

阪神大震災で大きな被害を受けた西宮市香櫨園地区の第二十三回運動会が二十三日、私立甲陽学院中グラウンドで開かれ、仮設住宅などへの避難者を含む住民約五百人が参加した。



地区体育振興会が毎年この時期に開いているが、例年の会場の香櫨園小学校グラウンドは仮設校舎が建ち、狭いため、開会式の会場で開いた。震災の犠牲者も多く、地区内八町の中には、区画整理の対応になっていないところもある。が、こんな時こそ、香櫨園はひとこを、ちの町民連帯は幼児の素アビリティといふと、避難者としてお年寄りのボウリング、活動にも参加を呼びかけ、親子二人組や十歳児が次々と展開され、見物席の家族から拍手や声援がのめりつた後、小学生を送られていた。

『読売新聞〔阪神版〕』 1995. 10. 23

（山内 英正）

十二 手記

大震災で感じたこと

中学一年 大坪 和人

地震が起こった時、僕はまだぐっすり眠っていたのに、飛び起きてしまいました。今まで体験したことのない激しい揺れでした。

すぐに地震だということは分かったのですが、頭の隅の方で、「爆弾が落ちたのではないか」などと本気で考えてしまう程驚きました。余震はしばらくしきりに起こりましたが、その度に雨戸が不気味な音をたてて揺れて、僕の足はぶるぶる震えていました。

僕はどっと疲れて寝ていたのですが、落ちた電気の片付けを適当に終えた両親が一階へ下りてしまい、心細いので僕も震える足で一階に下りました。

そして、テレビを見て驚きました。ビルや住宅がボロボロに壊れていたのです。火事の様子も見ました。また、専門家が「大きな余震の心配がある」などと言っています。

した。それもあって、僕はこれまでに無い程の強い恐怖を感じました。

そんな強い恐怖の中でつくづく思ったことがあります。それは人と人との結びつきです。僕は、特に友達の大切さを感じました。

僕はそれまで、小学校など遊びに行く所だと考えていましたが、もう一つ大切なことを知ったのです。友達との触れ合いです。地震の日は学校が休みだったので、僕は学校に行きたいと思いました。行つて友達に会いたいと思いました。そんな気持ちになったのは初めてでしたが、確かに友達といると落ちついたし、みんなで楽しんでいると地震のことも忘れられる様でした。また、被災地の人たちも、人の結びつきの大切さを感じた様です。今度の地震はこれまでに無い恐怖を与えると共に、大切なことを教えてくれました。自然には、どんな形であっても学ぶものがあるのだと思いました。

人間という本当の姿

中学一年 荒木 宏之

ぼくは、この大震災で一つ大きな事を学んだ。これまで人はおろかでむなしなものだと思っていた。核兵器をつくり出して人を殺すことを考えたり、何の罪のない人を殺したり……。でもこの震災の時は違った。みんなが心を寄せ合い、知恵をふりしぼり、体に汗を流す。いつもいつも便利な生活で人間というものを発揮できなかったけど、この震災の時、人間は本当の姿を発揮できたと思う。ぼく自身も一生懸命がんばった。震災のあと四十二度熱を出してしまって周りに迷惑ばかりかけていた。みんなががんばっている。みんなが必死にやっている。そう思って自分もがんばった。入試はもうすぐそこだけど、自分は落ちてもいいと決心し、家の手伝いや水を運んだりした。普段は家の手伝いもほとんどしないし、家族のために何も役立っていなかった。だから、ぼくはこんなに自分でがんばれて満足している。自分というものを見つけられて本当に満足している。どたんばに追いこまれ

た自分を十分発揮できた。もし、あの時、ずっと受験勉強をしていたらどうだったろう。一つも大切なことを学ばず、ただただ勉強だけがすべての平凡な人間になっていたかもしれない。生きている喜びを実感しないまま通り過ぎていたかもしれない。でも、ぼくは、今、自信に満ちあふれながら、毎日を送っている。

震災と僕

中学一年 中島 俊輝

一月一七日午前五時四六分、僕は、あの大地震に目を覚ました。はじめは、何が起こったのかわからなかった。最初二度程上下に揺れ、少し間があつて左右に揺れ出した。ミシミシバリバリという音がしてそのまま家がくずれてしまうのではないかと思った。ベッドの上に寝ていた妹は、「まるで、トランポリンにのっているようだ。」と言っていた。ドアがつぶれて出られなくなったら困るので、最初にドアを開けた。外は停電でまっ暗だったので、最初とても不思議だったのは、暗がりの中で音もなく

「シーン」としていたことだった。救急車やバトカーの音も消防車のサイレンもなく、音も光もない世界に閉じこめられたようだった。あとから思えばその静けさの中のあちこちで多くの人が亡くなっていたのかと思うと、とても恐しい気がする。

ぼくたちは、パジャマの上に上着を着て、靴をはき、近くに住んでいる祖父たちが無事かどうかを見にいった。幸い祖父たちは無事であった。たくさんの人たちが、家の外へ出て、ただぼう然と立っていた。ラジオを持っていた人がいたのでニュースをきくことができた。それから二日、近くの避難所でくらしした。ひっきりなしにくる余震の中で、服を着たまま、枕元にリュックと懐中電灯と靴をおき、うたたねをした。リュックの中には、ぼくの部屋からかき集めた参考書が入っていた。はじめのうちは、静かだったまわりも、そのうちサイレンの音でさわがしくなり、マスコミのヘリコプターの音まで聞こえてきた。

こうやって、ふり返ると、今でも僕が生きているのが

不思議なくらいだ。地震を通して感じたことは、「人間には運命があるのだろう。」ということだ。この先どんな運命が待っているか想像もつかないが、ぼくは与えられた運命の中で最大努力をしていきたいと思っている。

地震を体験して

中学一年 国塩 大泰

地震の起こった後、僕は他の人の役に立つようなことをしなかった。弟ですら、一回水をもらうために何時間も給水車を待ったのに。それは、僕には「受験」が目前にあったからである。みんな、ただそれだけの事で僕を優先してくれた。だから「何としても合格しよう。」という強い意思を持ち勉強した。これも、しんどい事だったが、他の人々はずっと苦勞している。家族や家を失った人たちにとれば「中学受験」は贅沢な話だろう。しかし、僕は三年間もそれを目標に頑張ってきたのだから後には引けなかった。

そして、無事合格することができた。もちろんうれしかった。だが、これは僕の手だけで得られたものではない。

乱されがちな心をまっすぐに導いてくれた塾の先生や、まわりの人たちに感謝しなくてはいけない。

僕の家族の被害といえば、交通が不便になったことである。おかげで父は、大阪に単身赴任することになってしまった。休日には家に帰ってくるが、その暮らしももう四ヵ月だ。

交通といえば、僕も被害を受けた。阪神電鉄が全線開通していないために、通学に二時間近くもかけなければならなくなった。神戸電鉄も不便なので大変である。しかし、みんな同じように苦しんでいるので、がまんしなくてははいけない。良い生活習慣をつけるためだと思えば、多少の早起きも苦にならなくなるはずだ。

僕は、地震後に他の人より苦労していないのだから、今後はみんなのためになることをしなくてはならない。そのために、大いに学び視野を広げて、神戸の復興や世界の発展のために、役立つ人間になろうと思う。

阪神大震災

中学一年 西尾 良介

地震の前日、地震が起きるとは思わなかったけれど、なかなか寝つけなかった。受験がまぢかで、緊張しているからだろうと思っていた。

地震が起こった日は、なぜか早く起きてしまった。まわりは暗く、目が覚めた理由は分からなかったけれど、寝ようと横になったら、地鳴りがおきているのに気づいた。体の神経がはりつめた。

いきなり、大きい音とともに激しくゆれだし、一瞬体が動かなくなった。いままであった地震よりも、ゆれがきつかったので、動かないで、ゆれがおさまるのを待っていた。

ぼくの方には落ちてくる物がなかったので、不安はなかったけれど、テレビが落ちてこわれたかと思った。

地震の後、部屋はぐちゃぐちゃだったけれどけがはなかった。眠かったから寝て、起きたら九時ごろで、電気もとにもどっていた。一瞬の地震だったけれど、その

時は百人くらいの死者だったのに結局は五千人にもなった。

地震があり、感じたことは、人は悪い人もいるけれどもいい人もいる。ボランティア活動を見て、人は助け合わないと生きていけないということだ。日本は外国にえらそうに言っただけなのに、外国の人は力をかしてくれた。

ぼくはいままで、なぜ勉強をするのかと迷っていたけれど、やっとその答えを見つけたような気がした。自分たちの町は、これから大きくなる自分たちで直し、よりよい町を造っていかないとけない。そのため、今は勉強をしているんだと思った。

阪神大震災

中学一年 柳本 健一

その時、僕はベッドの下からおし上げられてベッドの上に立った。異常なことではあったが、その他は何もわからない。父が呼んだ。二人で母と妹たちを呼んだ。五

人無事。居間は本棚が倒れ、食器はこなごなになって、ピアノも動いていた。こわれたオルゴールがなっていた。外からは泣き声がきこえる。この時、急におそろしくなった。

「どうなるねん、これから。」と思った。

父はおまえの今日までの努力を誰もかわってやれないからと言って、リュックサックに散らかった勉強道具を入れてくれた。そして、二人暮らしの祖父母の西岡本の家に行った。途中では、おとしよりが戸板で運ばれていたりした。火事でけむりがすごかった。父の会社も本社が倒壊した。父が会社の事をする間、僕は川から水をくんだりした。寒いし空腹だったはずだが何も感じなかった。夕方、二人のおじが大阪から単車で坂を上ってきた。死んでいるかもしれないと思いながら来たそうだった。おにぎりや水をもってきてくれた。おいしかった。十九日早朝、父は会社を守り、母は子供を守るようにしたらしい。僕達は父と別れて大阪に線路を歩いて行った。大阪の街は何も変わっていなかった。神戸は大変なものにと、何か

腹がたった。僕は物は沢山なくしたけれども、親しい人をだれもなくさなかった。幸運だと思った。自分にとって何が一番大切なかがよくわかった。

でも、まだ大震災は続いている。父と別れる時に約束した「おたがいがんばろう」と。そして、その時、僕は父のためにがんばろうと心に決めた。母も妹も僕のために協力してくれた。僕にとって一番大切なのは家族だった。神戸の復興は今始まったばかりだ。

僕は神戸が好きになった。生まれ育った神戸のことをそんなに考えたことはなかったが、今、とても大切なふるさとだ。

(中学一年生は一九九五年度入学生)

阪神大震災

中学三年 瀬津 智久

一月一七日のあの日、突然の地震、寝ていた自分は何が何だかわからず、ただ布団にもぐりこみ揺れがおさまるのをまつた。この地震が今日学校の話題になるな、

とのん気に考えていた。部屋の本箱が倒れてきていて苦勞しながらも部屋からでて家族の安否を確認した。部屋が暗い、夜明けの光だけがたよりだ。ラジオから震源地など知らされる。懐中電灯で下に散らばったガラスの破片に気をつけながら、日が昇るのをただ待った。

日が昇った。部屋の整理をしよう。この様子だと今日は学校はないだろう。死者が二、三人でてると知らされている。火災はおきてないと知らされている。整理に一段落ついた。母が「コンビニで何かないか見てきて。」

と言った。そうか、水が出ないんだ。はじめて家の外に出た。くずれている家が数軒目につく。死者二、三人じゃすまないかも…コンビニは大混乱だった。ある人は手に持てるかぎりの食料(といってもスナック菓子)を、ある人は箱に手あたりしだい、いろいろなものをつめこんでいる。そこまでしなくても…半分あきれながらコンビニを後に…。

二時すぎTVがついた。電気がきたんだ。…そしてTVの映像をみて、高速道路の落下をみて、今この地域で

何がおこっているのか改めて知った。死者の数は時間がたつにつれて増える。二、三人どころではない。百人単位で増える。家の倒壊数におどろき、生き埋めの人のあまりの多さに恐れた。時々くる余震。そのたびに身の毛がよだち、不安を感じた。電気がついた、ということは自動販売機が動いたのでは、急いで家をとびだした。先ほどのコンビニの状況がひとことではなくなった。もてる限りのジュースを買い、くずれかけた家のそばを走り、家につく。

夜、暗闇の中、炎がただ燃え広がる。TVの映像でそれを見て、近くでおこるサイレンの音を聞いて、たびたび起こる余震を感じて、いつでも逃げだせるように準備して、不安のままその日を終えた。

次の日から報道はいっさい地震に関して。新しい情報に敏感に対応して、自分は水くみの日々をおくる。余震はなおとだえない。死者が三千人を超えた。友達の安否を知りたい。だけど電話が通じない。二、三日たち電話が通じた。無事を知らせて喜ばれ、無事を知って喜ぶ。

各地でおきているボランティア、助け合い、ふだん見られない日本の姿、日本各地なにか役立つことをしようとしている姿。天災はしかたない。そこからどれだけの人の心がどれだけの人の心を救えるのか。助け合いは日本のみでとどまらなかった。世界各地で呼びかけられた。

地震から一ヶ月たった。さわぎは少しずつ波をひいてきた。これが半年たつて一年たつて十年たつと、人々の心からこのさわぎは確実にうすれていくだろう。それはある意味しかたないと思う。地震がおこるのもしかたないと思う。でも、今度もしどこかでおきてしまったら、それに対応して助け合いの輪がまた広がってほしい。自分もまた、それに応えていきたい。今度の地震で学んだ事、天災の恐ろしさを痛感、そして人々の助け合い。これを今後の参考に是非していききたい。

震災日記より

理事長 辰馬 伸彦

平成七年一月一七日（火）晴 早朝五時四六分淡路北部を震源とする神戸芦屋西宮から宝塚、伊丹及びその周辺に亘る直下型大地震が発生、都市部壊滅の大被害をもたらす。神戸市・芦屋市・西宮市・淡路北部で震度七、兵庫県南部大地震、阪神淡路大震災と呼ぶ。

熟睡をしていた。急にベッドがゆすられるのを感じ目を醒ました。まだ覚めきれない頭では、始め何が起こったのか判らなかった。家全体がユッサユッサと揺られている感じ、今まで知っている地震の揺れとは全く違う。しかし足元の箆筒が倒れ掛かって来るに及び、「これは地震だ！」と気がついた。一分足らずの時間だった筈だが、かなり長く感じた。もうどうしようもないので、ふとんをひつかぶってじっとして揺れのおさまるのを待った。凄く大きな揺れで、相当な被害が出ているに違いないと思う。電灯のスイッチをひねったが当然点かない。

ともかく家族の安否が心配になり、寝室から出ようとしたが通路を手探りをするも壁の様なものがふさいでいて通れない。何はともあれ脱出路を確保しなくてはと思い、とって返して窓の方へ向かう。こちらも箆筒が倒れ込んで居たが比較的軽く簡単に起こせた。窓を開ける。薄明の中にいつもの屋根の並びが見える。心なしか全体に霞が掛かった様に見える。東南の方向に一筋の黒煙が上がっている。この煙は急激に勢いを増したが、後から思えば阪神高速の桁が落ち転落炎上したトラックのものであり、霞と見たのは崩れた木造家屋の瓦土のほりであった。何とか脱出口が確保された安心感と、窓から薄明かりが入ったので、再度通路に向かい、塞いで居た本箱を起こす。更に鏡台がストールの上に倒れ込んでいる。引き起こすと幸い鏡が割れている様子はない。扉を押しかけて「無事かー」と大声を出す。二階から子供の返事が返って来た。廊下へ出る。散乱した中を踏み分けて台所の扉を開ける。食器戸棚が倒れているのが薄明かりで判る。陶器類、ガラス類が散乱している有様に、入るの

を避けて迂回する。こちらでも仕切の衣装箆笥が三〇センチ程ずれ、横になりようやくすり抜けられた。妻の寝所の戸はつかえて外から開かない。もう一度「大丈夫か!!」と声をはりあげると、「大丈夫……」との声が返って来てホットする。かくしてThe Longest Dayが始まった。

すぐ出られる様にバジャマから作業服に着替える。不時に備えてセーター、チョッキ等何時もより厚着する事とする。間もなく出てきた妻を見ると左こめかみから出血している。棚から落ちた本に直撃されたと言う。深手でもなさそうなので、二階から降りてきた子供に救急箱をもって来させて応急の手当をする。

水道の蛇口をひねるとカランの中の水滴がでたのみで、後は空気の音ばかり。これは大変と風呂場へ昨夜の残り湯を見に行く。散乱している小物を脇へよせて風呂桶を覗く。蓋が外れ桶の中にはまり、中の湯も半量に減っているが、幸い栓も抜けず、また桶本体も無事の様でホットする。しばらくこの水を大切に使わなくてはなるまい。ついでに屋上の太陽熱温水器から引いた管の蛇口

を確かめればこれも無事の様である。ともかく上下三〇〇程が確保出来た。

停電でテレビはつかぬ。携帯ラジオの用意も無い。すっかり明るくなった庭に出て、もう一度周囲を見渡す。先程薄明の中変化がないと見た町並みだが、変わらぬのは洋風の建物で、すぐ前の和風建築の瓦屋根はずり落ち、二階の壁が崩れ部屋内の家具が見えている。南方の黒煙は一層多くなった。東庭へ出る。東北のはるか彼方にも一筋の黒煙が上がっている。南隣の社員寮の庭でボリウム一杯のラジオで、「震源地は淡路の南、徳島・和歌山で震度五」と聞こえてきた。

子供と二人、倒れた下駄箱を起こし玄関口の整備。暮に植木屋が届けてくれた松竹梅の鉢が転落して梅の根がむき出しになっている。枯れぬ先に庭へ植え直しをしながらは……と拾っていると、玄関の戸を叩くのが聞こえた。開けてみると近くに下宿している考古資料館勤務のM君である。「皆無事ですか?」「おかげで……」と見ると額から血を流している。やはり落下物にやられた

らしい。手当しながら尋ねると、下宿の建物は痛んだが倒れなかった。昨日、資料館で展示品を出したままにして居たので痛んでいないかが気になって、これから確かめに行く途中に寄ったと言う。尋ねて呉れた礼を言つて、

「自転車を貸そうか」と申し出たが、歩いて行くとの事で、「氣を付けて・・・」と送り出した。

外へ出るべく財布、カメラ等の置いてある書斎へ入ろうとして扉を押してガックリ来た。内側から書斎が倒れ掛かって塞いでいるらしく、扉はほんの三廻程押せるだけで、それ以上はどう工夫しても開かない。焦つてみてもどうにもならないし、外部の事が気になるので一応あきらめて素手で行く事にする。

近くのワンルームマンションの末娘が気になるので、自転車でもこちらに向かう。隣家のブロック塀が見事、一列に倒れている。庭を覗く。大学生の息子に尋ねると早朝起きて居た老人が落下物で顔に負傷した以外は無事。家の中はグチャグチャで、日本家屋の建物も鴨居が傾き、壁に大きな亀裂が来たが何とか保っていると言う。別れ

て北上、商店ビルのショーウィンドウの中がさんざ散らかつて居るのを左に見て行けば、数件の和建築が崩れ歩道を塞ぎ迂回を余儀なくされる。車道のアスファルト、歩道のタイル敷、何れも地割れや、両側から押され盛り上がりたがタガタに段がついている。いかりスパーの建物は無事、しかし道のわきの電柱は転倒しないまでも全て北側へ傾斜して、ヒヤヒヤしながら横を抜ける。

ワンルームマンションの南側のお宅は一階が完全に押し潰され、二階部分が道にずり落ちて居る。この形の崩壊は到る処で見られ、そこその幅の道でも通行が出来ない所が多かった。昨年建ったばかりのマンションの建物は無事だったが入り口の段のタイルの継ぎ目が破れ、砂混じりの水が溢れている。(ミニ液状化現象)玄関近くのパネル機がピーピーと信号音を出し続けて居る。二階の子供の部屋をノック。「こわかった。グチャグチャや。」とそれでも元気な顔を見せたので安心する。他の入居者達も顔を覗かせたので淡路が震源地と告げると、誰かが「神戸で震度六だそうです。」と言う。一応皆無事らし

いので又外へ出る。

明けきつた晴天の街路で、飛び出した儘の様子で寝間着にはおっただけと言う感じの人々が、相当数うろうろしている。大寒の季節だが寒さを感じない。

阪急甲陽線の踏切は鳴りつ放しだが遮断機は上がったまま。苦楽園駅に列車止まっているのが見える。線路の両側は戦前の古い家の並んだ所で倒壊が多い。

阪急夙川駅前に出る。ガードの擁壁が傾いて継ぎ目がかなり開いている。こわごわ抜けて改札へ。壁面のタイルがはがれ、ここでも一列車止まっているが、車の屋根の傾きを見ると脱線しているに違いない。出勤姿の数人が、「運転中止」の張り紙をしている駅員と押し問答。

駅前の羽衣橋を越える。ペットショップのある二階建ては崩れ落ちている。千歳町のホームドクターM医院、表は一応の形をしているが、そばの人の話では裏が崩れ老夫人が閉じこめられているとの事。格子を開けると成る程青天井、残っている階段を上がると崩れた屋根の梁の上でドクター以下数人が取り除け中。一応手は足りて

いる様子なので次へ回る。大井手町のT氏が気になり、左折北上して驚いた。阪急線大井手町の高架の北半分が一〇〇米程北へ倒れ線路が宙に舞っている。裏へ大回りする。古い生協の事務所も完全に崩壊、その前の親戚T氏のお宅は二階建てが瓦屋根だけになっている。立っている人に聞くと「誰方も出て来られなかった様」との事。素手で手に負える事態ではない。直ちに千歳町の本家の邸宅まで引き返す。本家の建物は新しく全く被害が見えぬが、向かいの数軒の日本家屋は全て倒壊している。驚いて居ると声を掛けられた。本家の若夫人である。今本家の三人が活躍し、向かいの倒壊家屋から数人を救出した所と言う。まだ息をついている三人に気の毒だが、M医院とT家の現状を伝え手配を願う。「こちらが一段落ついたらすぐ見に行かせます。」の夫人の言葉に「宜しく」と言置いて、兄の家に向かう。夙川筋への途中も軒並み倒壊か、傾いただけの家でも塀は完全に潰れている。角を曲がる。途端に目に入った信じられぬ光景は、その後画報には必ず紹介された「マンションN」の倒れかけ

の姿であった。

J Rのガードを南に越した一角は広い範囲で和風建築が並ぶ一帯で全て倒壊し、家屋が思い思いに空を向いている。南の四階建鉄筋マンションも屋上のラインが東下りの様なのでよく見ると、一階の駐車場の東端が崩れている。

二号線の夙川橋は両端が下がった所為か、中央部が二〇厘程上がった段が出来て、これ乗り越える車が徐行するので渋滞の列を作っている。

兄の家の塀は昔からの煉瓦造部分が倒壊、庭がむき出しになった。煉瓦屑を乗り越えて入る。出て来た長女に全員の無事を確認。建物構造はよいが母屋が沈下し離れ屋との取り合いに一尺程の高低差が出来てつなぎ部分がすっかり壊れた。

周りの惨状を伝え、再び南下する。阪神のガードを越えた煙草屋の公衆電話には一〇数人の列が出来ている。

T医院のお宅の前を過ぎる。外観は大丈夫。裏木戸から声を掛けるも応答なし。諦めてさらに南下、甲陽中学を

目指す。

北側の教員住宅はひと気がない。只一軒、二階の手摺から子供が二人覗いている。『お父さんは?』と聞くと、『電話してる』との答、大した被害はなさそうなので中学の外を一周して正門へ。開いて居た脇門から入る。建物は無事で丁度バジャマにガウン姿のY事務長が数人の職員と点検に回っている最中であった。地震により水タノクが溢れて廊下が水びたしの状態とか。人員、建物の被害は聞いていないと言う。『しかし、本家酒造の酒造博物館展示の古い建物が全部倒壊しました』と悲痛な声を出す。学校とも深い関係のあるM医院とT氏のお宅の惨状を告げ、『何とか救援を・・・』と依頼して出る。

すぐ近くに友人のK氏のお宅が有る。戦前からの和風建築なので先ず駄目だろうと回って見た。門前で家屋、門、塀とも無事なのを確かめホッとす。戸を押して入り玄関より声を掛ける。夫人、続いてK氏、お嬢さんと全員が顔を揃え無事を確認。この辺りは阪神線付近に比べましの様だが、それでも近所でマンションが一つ、普

通家屋が一軒倒壊したと言う。ただ自宅もガタガタで傾き、早急にマンションでも探して移らなくては・・・との話し。

酒蔵通りを東行、角の市立図書館は無事、ガラス窓越しに本の散乱が窺える。この辺り北側にやはり数件の倒壊が目立つ。新築の親戚一家は窓を閉めた儘、よくみると焼け残った儘置いてあった土蔵が傾いて母屋に寄り掛かって居る。

前方に会社の鉄筋コンクリートの醸造蔵が無事な姿で立って居るのが見えて安堵する。近付くとそれでも戦後すぐに造った煉瓦造りの塀が倒れ、不法駐車トラックを押し潰して居るのが目に入った。西側の出荷場に積んであった空瓶の山は崩れ、ガラスの破片が散乱し、排水処理のタンクが破損したらしく、暗褐色の処理汚水が一面に溢れている。

会社的大门は開けられて、すでに何名かの社員は出社して居る模様。ガス洩れの臭気が満ちている。そう言えば来る途中で同じ臭いがしていたのを思い出す。事務所

一階を覗くと書類は散乱しているが、コンピューター類は落下せず無事の様子。二つの事務所建物をつなぐケールや配管は切れて垂れ下がっている。

醸造最盛期の酒蔵に直行する。Y製造部長はもう出社して泊まり込みの季節労務者（蔵人）を食堂に全員集合させて居る。聞くと酒蔵が無事であったので付属の宿舎は無傷で、全員大した傷も無かったと言う。出身地にも一応、すぐの電話で無事の通報を済ませたとの事。取りあえず状態を把握すべく、製造部長、杜氏二人と工場内に入る。蔵内を覗いて絶句した。停電で薄暗い中に、普段整然と並んでいる醸造タンクが右へ左へと傾き、タンクの間を繋いでいる頑丈な鉄製足場は押されて、鉋の様にヒン曲がり崩れ落ちているのが見える。三階に昨秋据えて試運転中の新型の大きな製麹機は、麹をいれた儘五〇糶程も西北へずれている。

先ずタンクの中味を助ける事を最優先に処置する様指示して、外部へ出る。気になっていた排水処理タンクへ。散乱したガラス屑の山を肝を冷やしながら乗り越えて近

づく。タンクの間をつないでいた二〇糎径のパイプが見事に吹っ飛んで、タンク内の汚水が殆ど流出しているのを確認する。排水タンクの上が上がって北を眺め、初めて隣接する百万石酒造の醸造蔵が完全に崩壊して居るのに気が付いて息を呑んだ。道に面している部分は平屋なので、せいぜい壁のはがれと屋根瓦のずり落ちしか判らなかったが、高みから見てその惨状に気が付いた。

この時刻になると会社の近くに住居の有る社員はぼつぼつ顔を見せる。聞くと自宅が崩壊した者はいないが、傾いたのは少なくない。電話が掛からなくなつて居るので、姿を見せない社員の状況は殆ど判らない。そのうちM総務部長の自宅が崩壊して妻子が閉じ込められて居ると連絡が入ったとの報告が来る。

AM一〇、社長に報告すべく、後をY製造部長にまかせて出る。来た時と道を変えて川東町を抜けて北上する。家屋の倒壊状況は似た様なもので、家並みの半分位、主に古い家がやられている。二階建ての簡易アパートの一階部分が潰れて道を塞いでいる周囲に、数人が群がって

いる。どうもまだ下に閉じ込められている人が居てその救出作業の様である。通れる道を選んで辿り何時もの倍、二〇分程で社長宅に着く。残念ながら先刻社長は出社し、入れ違いとなった様子である。

早朝より開放だったので、一度帰宅する事とする。二号線の夙川橋は地震で出来た段を避けて車は歩道へ迂回している。堤防の道は地割れが激しい。ガタガタにめくれた歩道を走って帰る。行きには気がつかなかったが、道の両側で一見無事に見えたお宅が、よく見ると壁が落ちたり傾いたりしている。

自宅の台所は留守の間に妻と子供で片づけていた。作業服を通常服に着替え、財布が出ぬので妻に一万円を借りて、弁当として昨日用意したサンドウィッチを持って再び出る。AM一一。朝から何も食べていないのに、空腹も感じない。

不動産部のY氏を探して、先ず事務所へ行くが不在。近くのY氏宅へ向かう。途中友人のK氏宅の前を通る。此処は無事の様だ。Y氏宅も昨年手入れをしたのが幸い

して、被害は無かったと夫人の話。此処でもY氏と入れ違になった。帰宅したら会社と連絡を呉れる様に頼み、ガスの臭いの強い道を再度会社に向かう。自宅南方のM歯科医の前で、自転車を押しているT君を見つけた。この様な時に知り合いを見ると無闇に懐かしく、声を掛けた。家は何とか無事、歯科医に用で来たと言う。丁度そこへM先生が出て来た。M歯科も軒の看板が外れて垂れ下がり、周囲の低い石垣は道側に膨れて傾いて居る。道が押したのか、石垣が押したのか判らぬが、すぐ下に沿って流れて居た溝は押し潰されて無くなって居る。T君の用と言うのは、奥さんが今日の一時に歯の治療の予約を取って居たが、地震で家の中が無茶苦茶になった為の断りと言う。律儀な事にM先生も苦笑いしながら、私の方も医療器具が壊れて治療どころでは無いので・・・。話に加わって尋ねると、M先生の家族も無事だが、家は可成りの破損の様子である。兄や、K氏等共通の知人の無事を知らせる。〃気を付けて・・〃と走りだしてから、そう言えば、自分自身今日一番の時刻にさし歯の

予約をして居たことを思い出した。大井手町T氏宅の前を抜けるがまだ先刻の儘で、救出作業には入っていない。M部長宅に回る。この辺り特に倒壊家屋が多い。M部長もバジャマにジャンパーを羽負った姿で、崩れた屋根を見つめて居た。まだ二人共助け出されて居ないが、今自衛隊に連絡して呉れる手筈との事。自分は二階に寝ていたのですぐ脱出出来たが、二人は一階で閉じ込められたと言う。激励の言葉を残し南下。安井小学校から、煉瓦の剥げたJRのガードを抜け、阪神市場の前へ。二号線沿いのビルにも凄まじいクラックの入ったものや、正面ガラスが完全に割れ散って片付けに大童の隣には、全く無事のビルが有る等明暗が甚だしい。崩れ落ちた阪神市場は全く入れないが、入り口で懸命に〃お父さん！お父さん！〃と呼んで号泣する数人あり。不幸があつたに違いない。阪神西宮駅南に並ぶ数軒のビルでも、白石ビルが見事に傾いている。傘下の中央パークینگ駐車場へ。係員が在勤して呉れて、鉄骨柱の外巻きのコンクリート剥がれの説明を受ける。中央商店街に入る。こちらのアー

ケードは一応無事の様だが、角のY文具店の二階建てが一階に変身したと見ると、北の柳通りの並びが全て同様である。南側の櫻通りは比較的倒壊は少ない様だ。

四三号線に出る。目の前に阪神高速道路の巨大な橋桁が、二スパン続いて落下し、大型のトラックが落下、押しつぶされた下の乗用車諸共黒く焼け焦げているすさまじい光景が入ってきた。東側落下スパンの上を吃驚した。赤白の派手な観光スタイルのバスが前の四分の一を乗りだした形で止まっている。よく落ちなかった事と感心する。下にはトラックの積み荷のジュースと覚しきペットボトルが散乱している。もう機動隊が出動し、西行き一車線のみで車両の通行規制を始めている。札幌筋へ出て南下、会社の東へ来て初めて東隣の本野田酒造の木造蔵も百万石酒造同様に崩壊して居るのを知る。むしろ瓦よりも土と材木の堆積の中に、醸造最中の珪瑯タンクがむき出しになって居るのが痛々しい。会社で聞いたところ、両隣何れも一人づつの季節労働者が犠牲になったと言う。特に本野田酒造の犠牲者はまだ発見されて居ず絶望

的らしい。暗澹たる気分になる。

会社では交通機関の途絶で、遠方の者は来れないが、近くはあらかた出て来た。連絡を済ませすぐ自宅の片付けに帰る者も有るが、作業可能な者を動員して、構内の散乱した製品や資材を片付け、道を付ける事から始める。電気は先刻一時帰宅した後で、Y部長がOCBが切れているのを発見、入れると通電出来たらしい。

遠方の被害の少ない所に居住する者を除き、本当に消息不明は数名に絞られたが、これ以上は電話が掛からぬ状況下でどうにもならない。

午後は再度、被害の確認、特に危険が予想される部分のチェックと、片付けの進行状況の監督に入る。第一応接室の置時計が吹っ飛んで落ちて、五時四六分を指して止まっている。電池式時計なのはどうした事かと調べて見ると、落下と同時に裏蓋が外れ、電池が飛び出したと判った。三時に不動産部のY氏が息子の運転で顔を見せた。車が通れない所が多く、苦勞して時間も掛かった由である。

宿泊している季節労働者の食事の供給が心配されたが、何時もの弁当屋が昼食時に届けて呉れた。聞くところの弁当は地震前に調整してあり届けられた。今後の分は約束は出来ぬが、作業場が尼崎なので被害も少なく多分届けられると思うとの事。実際その後途切れる事が無く、大いに助かった。

その後は事務所の片付けに終始した。机の横の仕切のパネルが、重い金庫に当たられて外れて仕舞い、元へ戻らないのでこれだけは諦めて、動いた机、書棚を元の位置に戻し、飛び出して散らかった書類を拾い集めて納める。電話の交換機が倒れて働かなくなり、メインの受話器が一台だけ局線につながっている状態で、しかもそれさえ局線が混んで何回かトライして初めて相手を呼び出すしかない。営業課員が支店、得意先への連絡に追われている。

夕刻、自宅へ帰る途中、近くの木造酒蔵の鶴正宗が気になり、その前を通る道を辿って見た。やはり建物が倒壊し無惨な姿を曝している。門から覗いて居ると、顔が

汚れた儘の顔見知りの作業員が毛布を抱えて出て来た。

聞くと朝作業に掛かる準備中に地震が起こり、ともかく全員怪我も無く脱出出来たが宿舎も潰れ、これから近所の浜脇小学校の避難所へ泊まりに行く所と言う。励ましの言葉も自分乍らしらじらしい感じがどうしようもなかった。この他西宮で木造酒蔵の倒壊は、東の方の木谷酒造、白鹿も残してあった木造蔵が殆ど倒壊したと言う。

阪神高速の鶴正宗のすぐ側の部分は落下こそしていないが、一本脚の橋脚が地上二米位の高さでコンクリートがはじけ、鉄筋が外部にむけてたわんでむき出しになっている。高架はその分だけ低くなっている勘定だが、いかにも崩れそうで下を通るに度胸が要る。

戎神社の石の大鳥居の上の棧は落下し、灯籠の類は全て倒れている。豊臣秀頼の寄進で重文指定の神社の土練堀の一部が崩れている。この練堀は戦災に際しても屋根の焼失に拘らず無傷であった。創建以来この様な揺れは初めてと言える。

この筋を北へJRの線路が走る土手に突き当たる。土

手の上に列車が横転している。土手の下方に谷崎潤一郎の「細雪」にも出る人道トンネル「まんぼう」が有る。煉瓦造りのトンネルは子供の頃からよく通り抜けたもので、「一本松」に通じる懐かしい道である。このトンネルは最近赤煉瓦の表面に化粧タイルを張り仕上げたが、表面のタイルが一部剥がれたのみで本体は無事であった。

まんぼうを抜けたすぐ北のW氏の家は、塀は倒れているが建物自身は無事。その西隣の並び数軒が潰れているから、数年前の建て替えが無ければ倒れて居たと思われる。一本松から北に出た通りの突き当たりのA医院が完全に潰れて居る。ここはM氏の実家で、この二階でよく麻雀をした事を思い出す。

その西の交差点に消防車が数台居る。角の倒壊家屋から火が出たらしく、黒焦げの廃材から湯気が上がって居る。すぐ近くのM部長家のあとに立ち寄る。瓦礫の周りには誰も居ず様子を聞く事も出来ない。北上し阪急ガード下商店街へ出る。ガード下の建物は流石に無事に見え

るが、殆ど閉ざされた中で一つ二つ開いているのを覗くと商店の中はやはり散乱していて全く片付けの気配はない。

すぐ北の親戚の家は、倒壊した建物で道が塞がれて居るので、迂回して遠くから、塀の上の屋根を確かめて無事を推測するだけである。

大井手町T氏邸の崩壊現場の前へ出た。門の横に自転車車が立て掛けてある。誰か来て居るかと思を掛けて見たが、答なし。周りに人影も無いので尋ねる事も出来ないが、ともかく救出作業は行われたものと判断する。

さらに北上を試みるが、周囲の倒壊が甚だしく、細い路地は自転車でも抜けられないので戻り、建石線を進む。C家も壁の亀裂が目立つがともかく無事。大回りして朝来た道に出て、ようやく帰り着いた。

我が家の門灯の点いて居るのを見てホットする。妻と娘は先程まで室内の片付けに掛かり切っていたらしい。しかしおかげで腰掛けてTVのニュースを見る事が出来た。真つ先に死者二〇〇人、行方不明八〇〇人の字が飛

び込んだ。今日見て来た惨状ではとてもそんな事では納まらない。死者が一〇〇〇乃至二〇〇〇人を出るだろうと、一日中家に居た二人に話す。夕刊は来いていないので、ニュースはT.Vのみで、画面に釘付けになる。神戸長田で大火が発生したらしい。西宮での出火が少なかった事に感謝する。阪急線や四三号線での高架の落下を目撃してきたので、方々で橋や高速道路、新幹線の高架の落下は納得出来たが、三宮での近代ビル、阪急伊丹駅、J R 六甲駅、阪神大石駅などの駅の崩壊、さらに阪神高速の高架の深江近くでの転倒の画面は目を疑った。

水、ガスは全く出ない。家の暖房機もスイッチが入らぬ。水の節約で小用は庭で足し、トイレは風呂の残り水で流す。風呂は沸かせないから、電気こたつを布団にセツトして体を暖める工夫をする。冷蔵庫に正月の保存食の残りほかの買い置きが有り一週間位は保ちそうなのを確認して、やや気が楽になる。電気が来ている以上、電気釜、電子レンジ、電気ポットで一応の調理は可能である。

早速有り合わせのもので夕食を取る。P.M七、食事中に停電になる。少時にして一度バツと点いたがすぐ消えて、今度はなかなか点きそうに無い。電池の買置きは開かずの書斎にあるので、懐中電灯が何時まで保つか心配ない。それにT.Vが見られないと手持ち無沙汰で、暗闇の中ではする事も無い。諦めて炬燵で暖めておいた布団に潜り込む。疲れている筈が頭ばかり熱くてなかなか寝付かれない。横になって居ると、今まで余り気にならなかった余震が、間をおかずに起きるのがよく判る。普通なら逃げるか、せめて起きあがる所だが動く気にもならず、余震位で潰れるものかと、布団をかぶってミシミシと建物がきしるのを聞くだけ。

家のすぐ側のバス道を、救急車や消防車が絶え間無くサイレンを鳴らして駆け抜けて行く。そんな音に気を取られている内にいつしか寝込んで仕舞った。

目が覚めて気が付くと電灯が点いている。時計を見るとA.M一。庭で小用を足し、家中の電灯を消して回ってから、もう一寝入りと布団にもぐり込むが、体を冷やし

た上に、なまじ数時間眠ったばかりに寝付かれない。しばらく床の中で転々としていたが、思い付いて今日一日の記録を残そうと、寢床の中で日記を書き出した。書いている内にも、余りにも多くの事が次々と浮かんで来る。ようやく日暮れ迄の分を書き上げて時計を見るとAM五、ここで震度三の余震があった。

(被災者で無く、たまたま被災地に居た者の体験談です。本当の被災者の経験は、遙かに凄まじいものであったと思います。只、被害が少なかった者でも、これだけのインパクトを受けたと言う事が、後世の人々に伝わればと思います。)

ロシア招待旅行

中学三年 藤田 温人

団体名：グローバル・レインボーシップ（ボランティア団体）

イア団体）

招待対象者：被災児童（兵庫県内）小四～中三

対象者人数：五十名（前期二十五名・後期二十五名）

自分は前期

期 間：八月四日～八月一日（前期）

食費・宿泊費・航空費等は無料。

八月四日（一日目）

午前六時に三宮を出発。バスに乗って名古屋空港へ。はじめこそはみんな話さなかったが、しばらくすると、みんなよくしゃべっていた。一二時一〇分にアエロフロートSU五九二便で名古屋をたつ。現地時間一九時二五分にモスクワに到着。日本との時差が約五時間なので、飛行機にはほぼ半日乗ったことになる。向こうは白夜に近い状態なので、夜の九時半頃までは明るい。その日は、

それからバスでイズマイロボホテルへ行つて泊する（ここからの七日間も）。部屋は二人部屋で、テレビはあるが、冷蔵庫はない。ロシアのテレビはチャンネルは六つ。バスルームにはトイレとシャワー。シャワーは、カーテンがついてないので使いにくい。ちなみにこのホテルはたぶん高級ホテルでなく、庶民的なものと思われる。くわしくは、後で説明します。とにかくこの日は慣れないことばかりでとてもつかれた。

八月五日（二日目）

朝食はホテルで。あいにくその日は雨で少し肌寒かった。（晴れならばかなり涼しくて気持ち良い。半そででも充分。）クレムリンを少し見たあと、モスクワ大学を見た。スターリン時代の高い建物で、モスクワには同じような建物がホテル等を合わせて七つある。そして、すぐ手前のヴァビョーヴィ丘（雀が丘）でモスクワを一望。とても景色がよかった。モスクワは、ロシアの首都であるが、日本のように建物が極度に密集しているのではなく、かなり緑が多い。また、ネオンサインはめった

に見られなかった。昼食はインツォリストホテルで。ここは外国人向けのホテルのようで、アメリカ人などがたくさんいた。午後は地下鉄に乗った。料金は非常に安く、どこからどこまで乗っても同じ。そしてさらに驚くのは博物館のような駅舎。とても見ばえが良かった。また、彫刻が多かった。モスクワでは、到る所に彫刻（銅像）がある。また、地下深い所にあるため、エスカレーターは日本の二〜三倍の速さで動いている。だが、車両はあまり高性能ではない。しかし、黄色い光が妙にムードを出していた。

八月六日（三日目）

朝食をすませて、バスでモスクワ近郊のコローメンスコエへ。とても広くてのどかで、歴史を感じさせる所だった。イワン雷帝などが、別荘を建てたそうだ。ズネセニエ教会は、上がロケットのような形をしていて石でつくられている。午後は、モスクワへ戻って遊覧船でモスクワ川下りをした。モスクワ川はとても汚く、緑と茶がまざった色をしていた。そして、夕方にはサーカスを見

た。さすがロシアのはとても迫力があつたし、実際にすごかった。

八月七日（四日目）

この日は、地元の子供たちとの交流会があつた。ロシアでは六月～九月が夏休みであるが、その間に、サマースクール（日本でいう林間学校）がある。ロシアの子供たちはとても友好的で、カタコトの英語でコミュニケーションをした。「スパシーバ」などというと、とても喜んでた。夕方は、アルバート通りにあう民俗舞踊会を見に行った。とても陽気でユニークなので、今のロシアとはいまいちパツと一致しにくかった。ちなみにアルバート通りは、歩行者天国で、とても活気があるので有名だが、治安が悪いのでけっこう怖かった。

八月八日（五日目）

この日は再び赤の広場、クレムリンへと向かった。赤の広場はとても広いが、観光客がとても多かった。レーニン廟や国立歴史博物館など、目を引くものはたくさんあつたが、なかでもモスクワといえばでてくるイメージ

の聖クシリー寺院を見たときは、とても感動した。グム百貨店はモスクワ最大だが、別に安いというわけではなかった。そしていよいよクレムリン内部へ入っていったが、そこには四方八方に寺院があり、文化遺産があり、見るべきものが密集していた。やはりモスクワにきて観光といえばここには来るべきだろうし、一番満足すると思う。午後は動物園に行ったが、中には何もいないおりなどがあり、たいしておもしろくはなかった。

八月九日（六日目）

朝は、宇宙飛行博物館へ行った。ガガーリンの乗ったカプセルや、着ていた宇宙服などが展示されていたが、あまり規模は大きくなかった。つぎは何と東京タワーよりも高いオスタンチノテレビ塔へ行った。高さは五百四十メートル。展望台でも三百三十七メートルということ。東京タワーのてっぺんよりも更に高いところで展望したということだ。そこで展望しながら食事をした後、パクロンナヤ丘に行った。そこには第二次世界大戦博物館があつた。そこにはドイツとの大激戦の様子や、日本と

の戦争の様子も展示されていた。広場のあちこちに、実物大の戦争（動かない）があつて、みんなめずらしそうに見ていた。

八月一〇日（七日目）

とうとうモスクワ最後の日、午前中は自由行動だった。ぼくは友達と地下鉄に乗りたりしてあちこち行ってみた。昼食がおわつて空港へ行った。現地のガイドさんにさよならを言つて飛行機にのりこんだ。

八月一日（最終日）

日本につき、飛行機を出たとたんに頭がクラッとした。とにかく湿けて暑い。今までが天国みたいだった。（気候については。）さあ、無事何も無く神戸へ……、と思つたぼく達をおそつたのは、トランク壊しだった。団体の約四分の三がトランクを壊され、貴重品を盗まれていた。ぼくは幸いトランクは壊されたが、貴重品はほとんど手荷物でもつていたので、時計を一個盗まれただけだった。ひどい人はキャビアや琥珀を盗まれていて、あとあじの悪い旅となつてしまった。しかし、ロシアなど

めつたに行かないだろう。そういう意味では、とても貴重な体験をしたと思う。

ーロシアのお話ー

・まず、道路は大通りなら四車線ぐらい（片方で）あつて、まん中に市電、外側にバス、トロリーバスが走っている。舗装は悪く、よくバスがゆれた。時に、交差点では、市電の線路が何またにも分かれていて、タイヤがそこにはまったら大ゆれしていた。しかも、ロシア製の車は故障しやすく、大通りでは十メートルに一台はエンストしていた……。

・ロシアの建物は外観はともいいが、内側の快適さがあまりない。けつこう見かけだおしがある。エレベーターもぎこちない動きだし、ボタンをおしても止まらなかつたこともあつた。

・食事はあまりおいしくない。どこへ行っても同じような料理。ボルシチやピロシキとよく言うが、逆にいえばそれしか食べれるものがないというほどのものだ。特に黒パンはすっぱくてたべられなかつた。（くさっ

てはいない。)

・水道水は硬水なので飲まなかった。しかも、水をたのんでもふつうの水と、炭酸水があつて、炭酸水はただ単に炭酸なのではなく、あの黒パンのすっぱさのある水なのだ。

・トイレの表示だが、日本では男女は色わけされているが、ロシアはどちらも黒。しかもとても微妙なちがい(スカートがちょこつとでてるのが女)なので、一回まちがえて女子便に入ってしまった……。

・向こうではあちこちに自由市場があるが、そこはロシア人がよく利用する。ぼくも行ったけれど、店は、キョスクのように箱状でガラス張り(たぶん盗難防止)のが長屋のようになっていて、それがいくつかあつまっている。商品はつまかさねてあつたりしていて、指をさしているのかかなり買いにくかった。

・物価は日本の大体六〇七割で買える。(百貨店は別。)しかし、インフレが激しいので、コインはめったに使わず、ほしくてもなかなか手に入らない。(両替所で

も断られた。)

・向こうに行くときはスパシーバやダ・スヴィダーニヤなどの簡単なあいさつを覚えれば、喜ばれる。

・向こうの電気製品などは安いけど、狂ったりこわれやすいのであまり買わない方がいい。

ーロシアの話 終ー

色々な事があつたけれども、本当に貴重な体験ができて良かったと思います。中には全、半壊した人もいましたが、皆本当にたのしそくに過ごしたので、とても効果のある旅行であつたと思います。

スイスよ、ありがとう

高校三年 細江 義章

あの恐るべき地震から半年の月日が流れ、僕の生活もようやく落ち着きを取り戻した頃、僕の元に一通の手紙が来たことでその旅の始まりが告げられた。

それから一ヶ月が過ぎた八月二〇日、僕は関西空港のスイス航空カウンター前にいた。前日になるまで全く想

像もつかなかったスイス旅行が目前にあり、僕にとって忘れることのできないであろう十三人の仲間がいた。

初めての海外旅行に胸がおどき、時を忘れさせ、十二時間の飛行機の旅はあつという間に過ぎ、チューリヒ空港に到着した。そして、最初の目的地ルガノへ向かった。ルガノへの列車で見た美しい星たちが、僕らのスイス旅行を祝福するかにように輝いていた。

ルガノでの滞在は三日、サン・サルバトーレ山に登って自然とふれあい、市内ではショッピングや市内観光を楽しんだ。ここでは、ほとんどイタリア語しか通じず、少しカルチャーショックを受けた部分もあったが、自然と街が一体化したすばらしい所だった。

次に向かったのはシャトデーという所であった。ここは山のふもとにある小さな村といった感じの所で、とても空気が澄んだ、落ち着いた場所だった。ここで味わったチーズの味とにおいは忘れもしないだろう。

シャトデーを後にし、途中、インターラーケンという所に立ち寄って買いものなどをした後、山の中腹にある

町ウエンゲンに到着した。次の日、ウエンゲンからユングフラウヨッホまで行き、地上とは違う別世界の感動に酔いしれる。その夜は同じ学校の友人、吉田の誕生パーティーが行なわれ、とても盛り上がった。おそらく彼にとっても、僕らにとっても、忘れえぬ思い出となった一日であろう。

ウエンゲンの町から離れ、後は帰国するのを待つばかりで、一路チューリヒへ向かう。旅の終りが近づき、さみしい気分になる。チューリヒで一泊した後、空港へ向かい、いよいよスイスとも別れを告げる。そして、そこには飛行機の窓からスイスの町に手を振る僕がいた。

あつという間の十日間だった。一人、暗い機内で十日間の記憶を思い起こす。初めての外国の感動、驚き、人々とのふれ合い、そして旅行中親しくなった仲間たちのこと、僕たちを十日間いやがることもなくひっぱってってくれた富永さん、小西さん、小林さん。様々な好意が集まり、こんな素晴らしい旅行が出来たことを心から感謝した。そして、今度はもっと勉強して、もっとスイ

スと親しめるようにしたいと思った。

ふと外を見ると、雲の向こうに太陽が姿を見せはじめている。日本まであと少し……。

こうしてスイス旅行は終りを告げ、また僕はもとの日常に戻った。旅行は終わったが、この旅行で僕が学んだものは数多く、僕の将来にきつと役立つに違いない。お世話になったみなさん、そしてスイスよ、ありがとう。

＊『ユングフラウを仰いで―スイス招待旅行感想文集

―』（神戸新聞社・神戸新聞厚生事業団・スイス航空株式会社、一九九五年十二月）より転載。この文集には、吉田忍「最高の誕生日祝い」、日山直哉「収穫多き旅」も収録されている。関連記事、「被災高校生スイスの旅」『神戸新聞』一九九五年九月二六日）。

二年

高校三年 日山 直哉

あれから二年が経つ。二年経った今でも、「阪神・淡路大震災」は昔の事ではなく、昨日の事の様に思える。「濃縮された一瞬」とでもとらえているのだろうか。この二年の大部分は記憶している。しかし、その記憶というのはしっかりしたものではなく、「果して自分は本当にそんな事をしていたのだろうか」と疑うほど確実性を欠いたものである。分からない事など山ほどあり、その多くはとりあえず勝手な自己解釈の元で脳に放り込んでいる。「目に見える結果」が出ているのならば、まずそれを第一に信用し、「現実」と「思い込み」とを折り合わせることににより何かが開ける様な気がする。案外、答はすぐそばにあるのかもしれない。

―一九九七年一月、執筆―